社団法人日本外洋帆走協会　平成２年４月15日発行（毎月１回15日発行）　昭和52年７月21日第三種郵便物認可　定価300円

Offshore 1990 4

No.180

大島レース40周年

記念特集 ❷

官能の大島レース

社団法人日本外洋帆走協会
会長　石原慎太郎

鎌倉から葉山へ抜けるあの無粋な海岸ハイウエイが出来る前の，まだ海浜の大きな会社の寮やマンションの建ち並ぶ前の，あの美しかった披露山をつぶして高級団地が出来る前，夕方ともなると披露山の上に無数のトビが高く飛び交っては落日を惜んだ頃の，可憐で美しく静かな逗子の入江に，年に一度，幻惑的な海の騎士たちが，緋おどし，紫おどしの華やかな戦いの衣裳でひしめき彩る催しものを，まだA級ディンギーを操っていた少年の頃の私は，確かな日時はおぼろげながら，夏前の歳時記として心にとめていたものだった。

A級ディンギーに手製のカンバスの前甲板を張り，大きなヒシャクを乗せ，不安と期待に胸をはずませ，浜木綿の北限と聞く佐島の入江まで長征に出かけていった頃の私にとって，鐙摺のハーバーにしまわれた僅か数隻のクルーザーたちが，騎士同志の仲間を呼び合い年に一度逗子の入江をスタートして行なっていた大島レースは，赴くところが，その頃はまだ遥かに遠く，エキゾチックでさえあったイメージの椿咲く大島だけに，めくるめく程華やかで美しい見物だった。少年の日に，それはまさしく，選ばれた，偉大なる者たちの祭であり，遥かに隔った世界の出来事に映った。

鐙摺のハーバーライトの立った突堤の先端で，コミッティが猟銃の空砲を放ってスタートを告げるのを間近で目にし，耳にしながら，一斉にスピンを張り，或いは南西風の真上りにヒールし，舷を接してスタートして行くオーシャンレーサーたちを，私は殆んど耽溺しながら，見送ったものだった。

ある春遅い夜，逗子の海岸で出来たばかりの女友達とデートしていた私は，突然，間近な海から響くマイクロフォンの声に驚いて握り合っていた手を離し，声と共に照らし出された保安庁の巡視艇のサーチライトの，ビームの中に浮び上がるクルーザーたちの姿に固唾を呑んだ。今まで手にしていたものの感触よりもはるかに甘美な戦きのうちに，あの海の騎士たちの戦いが今日は夜を選んで行なわれていることを知りながら，私は我を忘れて，間近かな沖合で行なわれているものに目をこらし続けた。夜，ひらめく光芒の内に，赤青の舷燈に帆を染め行きあうヨットは，昼目にするよりもはるかに怪しく美しかった。私の耳に寄り添った女友達の声よりも〝寂寥，暗礁，星の影，わが船の帆の真白なるなやみを与えしすべてのもの。〟というマラルメの詩句が鳴っていた。

私は今でも，「お吉丸」「天山」「ムヤ」「桜」といったかつてのレーサーたちの名と姿を，今では大方の記憶の彼方に薄れつつある，モンテカルロやルマンでトップレーサーとして華々しく活躍した，ペガソ，マセラッティ，モーガン，フェラーリといった車の名と，たとえ今もあるにしても，今あるそれよりもはるかにその名にふさわしく感じられた彼らの当時のシルエットを思い出すと同じように，私自身の記憶のスクリーンに，鮮やかに映し出すことができる。

私に，自分もオーシャンレーサーたらんという願い，というよりも渇きを与え，分際もわきまえず，その戦いのための船のオーナーたらんと心に決めさせたのは，私にとって始原的ともいえる，少年の頃見た花の大島レースの悩ましいほど美しく華やかな印象が，宝石のように結晶したいくつかのフラグメントに他ならない。

あれから幾星霜，どうやらその願いもかなえられ，それでも尚，渇きはいやされることなく，私自身がその海の饗宴に加わる人間の１人とはなった。すぎていった年月は，大島レースに限ってみても，大きく多くの変化を与えてくれた。逗子の入江の印象も激しく変わってしまい，大島も変わり，艇速がのび，経験がつまれた今，かつての花の大島レースはもはや胸つまるほどの長征ではなく，ある者たちにとってみれば，手の筋よりも知りつくした海の庭の内の出来事としか感じられはしまい。野暮な釣り船と野蛮なモーターボートに満ち，凶悪な大謀網に塞がれた入江はもはや，船の大きさも数も増したオーシャンレーサーたちを収め切れず，スタートは，人の眼のとどかぬはるか沖合に移され，陸の上にいる関わりなき人の目を驚かし，貧しく幼いものたちに海への戦慄と憧れをはぐくむこともあり得なくなってしまった。そして，この催しは，今年すでにその齢を30に数えると聞く。

しかし尚，それでも尚，このレースは依然として，特に年経たオーシャンレーサーにとっては，花の大島レースであり，オーシャンレースの原点でもあり，ヨット乗りのメッカであるに違いない。少なくとも私はそう信じている。

（本稿はＮＯＲＣ大島レース30周年特集「官能の大島レース」より転載したものです）

第35回大島レースで完全優勝した石原会長の“コンテッサⅧ”

日本オーシャン・レーシング・クラブ(NORC)の発足と初期時代

NORC顧問 福永 昭

関根久氏との共同所有だった“まや”(横山23)

発足まで

1953年，ＣＣＪ（クルージング・クラブ・オブ・ジャパン）によって第３回の大島レースが行われたあと，主だったアメリカ人のメンバーが大部分本国へ帰り，その後の運営が期待できなくなった。

一方，第２回大島レースの“インデペンデンス”，第３回の“アルバトロス”の優勝によって，小型外洋レーサー（ＪＯＧ）を造ろうという気運が日本人の間で徐々に燃えあがりつつあった。

そのころＣＣＪの発足以来の熱心な仲間であったイギリス人，A.A.マッケンジー氏から，日本人側オーナー達に対して，新しく日本人の手で，日本にふさわしい外洋レースとクルージングを主にしたヨットクラブを作ってはどうか，と云う呼びかけがあった。根本になるレーティング・ルールはＣＣＪ時代と同じく，ＲＯＲＣルールを用い，クラブ組織その他は永い歴史を持つＲＯＲＣ（ロイヤル・オーシャン・レーシング・クラブ）のものを参考にするようにしてはどうかと，多数の参考資料を提供された。

横山，渡辺，土井の各氏を始めＣＣＪ以来の熱心な連中が何回か集り，1953年一杯かかって，クラブ規則，レーティング・ルール，安全規則，クラブ旗，年間レース予定及びコース等の案を検討した。特に安全規則は，マッケンジー氏から資料を提供されたＪＯＧの規則を多く取り入れた。

1954年１月21日，外洋レースに熱心な多勢のヨット仲間が集り，日本オーシャン・レーシング・クラブの発会式を東京の精養軒で行った。席上，ＣＣＪ以来の山口四郎氏に会長，A.A.マッケンジー氏に副会長をお願いし，小山捷氏に技術顧問，発足までの世話をやいた人達がコミッティを引受けることになった。その後，３月末に行われる第１回の館山レースに備えて，計測その他着々と準備が進み，またオーナー，クルー達も艇の準備にとりかかった。

レースが始まる

第１回の館山レースは横浜をスタートし，館山に置いたマーク・ボートを廻って，横須賀のアメリカ海軍ヨット・ハーバーにフィニッシュする約50浬の予定であった。

このスケジュールの打合せにマッケンジー氏の所を訪ねた時，私が横須賀に「ゴールイン」すると話した所，忽ち注意を受けてしまった。「ヨット・レースはフィニッシュするのであって，ゴールに入るのはフットボールだ」と。

このレースには，アメリカ海軍の横須賀ヨット・クラブから，マーク・ボートと監視艇としてＡＶＲ（飛行機救難艇）を出してくれるとのことで，当時横須賀ヨット・クラブの面倒を見ていたトレスター海軍中佐が色々と骨を折って下さった。

さてレース当日，各艇元気一杯横浜に集って来たが，スタート時刻に近づくに従い，猛烈な南西の風となり，帆走委員もいささか心配となって来た。そうこうするうちに，横須賀のアメリカ海軍基地司令官から，気象状況を検討した結果横須賀ヨット・クラブの艇はレース出場を見合わせるようにとの電話がかかってる。とうとう，山口会長，マッケンジー副会長，帆走委員一同打合せの結果，スタートを明朝に延し，なおコースを縮め，木更津沖ブイを廻り，横須賀にフィニッシュする事に変更した。

翌朝，風は相変わらずビュービューと吹いている中を，各艇初陣ながら仲々見事にスタートし“羽衣”だけが棄権し，12杯中11杯が横須賀にフィニッシュした。Ａクラスは“ＭＵＹＡ”Ｂクラスは“さくら”が優勝した。

この年は４月に館山レースを行い，“アルバトロス”がフリート１位，Ｂクラス１位，“モカディック”がＡクラス１位であった。

５月には，ＣＣＪ以来の大島レース第４回が行われ，“ＭＵＹＡ”が優勝し，Ｂクラスでは“まや”が１

1960年大島レースでフィニッシュする“ふるたか”

位だった。この時の状況は1958年の大島レースと同じような風向で，同じく“MUYA”が優勝したのは，偶然でもないようだ。この第4回大島レース“MUYA”（マレー氏艇長）が19時間55分15秒で100浬を走った記録は，その後長らく破られなかった。

7月には小網代湾でランデブーを行い，9月の館山レースが台風のために延期され，ちょうど洞爺丸のひっくりかえった日に，レースが行われた。このレースから木更津のアメリカ空軍ヨット・クラブの艇3杯が毎回レースに加わるようになった。このクラブには，B−17が積んでいた，モールデッド・プライウッドの救命艇を改造した艇が3杯あり，ヨットに詳しいのはフォスター氏1人，あとは殆んどしろうとばかりだった。後々，フォスター氏に聞いた所によると，この救命艇の船体は，ウーファー・フォックスのデザインしたものだということで，1957年木更津の艇が引揚げるまで，毎回レースによく活躍した理由も，なるほどとうなずける。

この年は10月に初島レースを行い，無事初年度の予定を終え，元気ある連中だけが11月に木更津レースを行った。

この最初の1年は，レースを1回，るごとに各艇にとっても，レース運営面にも新しい教訓が得られ，その後の順調な発展の為の実に貴重な1年であった。

2年目

1955年は，前年の経験を基にし，各艇長，艇員の意見に従いレースは年4回，小網代湾で夏にランデブーを行う事にした。1955年で特に注意すべきことは，新しいJOGが急激に増えたことと，マスト・ヘッド・リグの艇が，4艇（“くろしお”“シャーク”“ふるたか”“ジョビアル・ファイブ”）建造されたことである。

またこの年末から，渡辺氏設計自作の新艇“どんがめ4世”が僅か20フィートながら目覚しい活躍を見せ始め，同じ流れをくむ“ふるたか”“ホワイト・クレスト”“月光”が順次建造されていった。5月の第5回大島レースはベテラン土井艇長の“フルール・ブルー”が優勝し，伊東，葉山レースには関根氏の“シャーク6世”が活躍し始めた。

この間に，危なかっしい艇は次第に淘汰され，また“モカディック”がビームを短くし，レーティングを下げたおかげで，性能もよくなり，安全性も増した例のように，オーナー達も既に持っている艇の改良に努力を払い，全体として，艇の整備が向上し，海上の安全という点に大きな進歩の見られたのは，外洋レースのおかげとも云えよう。

この第2年度の経験から，1956年度に新しいレースとして神子元島を廻るレースを加えることとなった。ファストネット・ロックに似たような神子元島は，伊豆半島尖端にあり，将来のレースを伊豆諸島の南へ段々に延ばす第1歩として，マッケンジー氏からも意見が出ていたコースであった。

1956年

この年は，渡辺氏の“どんがめ4世”が，神子元レースを除き，4レース中3レースに毎回優勝するという素晴らしい成績をあげ，年度のポイント・チャンピオンシップを獲得した。第1回の神子元レースは“ふるたか”が優勝し，このレースのために作られた神子元島灯台をかたどったトロフィーが与えられた。

1955年建造の初代“ふるたか”（渡辺20）。1957年の第7回大島レースで優勝

なお初島レースはこの年から，横浜をスタートし，初島を回り，葉山にフィニッシュするように改められた。

一方ヨット協会からは，協会主催の外洋レースを協会のレーティング・ルールで行うようにということで，NORCの委員と打合せが行われたが，NORCルールでやることを主張したNORC側の意見と折合いがつかず，とうとうこの年も協会の外洋レースは実現しなかった。

NORCと関東ヨット協会とはこの年から次のような関係を持つ事になった。即ち，日本オーシャン・レーシング・クラブの関東支部は関東ヨット協会の外洋レース部門としてその事業に協力するというわけである。これについては，関東ヨット協会長大村泰敏氏と，同協会理事，高原清彦氏の尽力による所が大であった。

1957年

クラブの運営は軌道にのり，安全

小網代ランデブー➡

規則，レーティング規則も次第に完備され，順調に事故なく予定通りのレースが行われた。館山レースは木更津米空軍の“春風”が優勝し，大島レースには最小艇“ふるたか”が２番目にフィニッシュし，シルバーカップを獲得した。

神子元レースについては，４月にヨット協会の小沢，竹下氏とＮＯＲＣ側委員とが懇談し，1957年の暫定措置として，日本ヨット協会主催，日本オーシャン・レーシング・クラブ及び関東ヨット協会主管という名目とし，ＮＯＲＣがすべてを実施運営することになった。そして協会が預っていた高松宮杯は神子元トロフィーと共にこのレースの優勝艇に与えられることになり，千葉大学の“くろしお”がこれ等を獲得した。

初島レースは“ふるたか”がフリート１位となり，年度のポイント・チャンピォンシップ・カップは同艇に与えられた。

１９５８年

1958年から，各艇で多くの経験を積んだ若い人達が多数コミッティーに加わった。また前年から引続き慶応クルージング・クラブの高校生達が，レースの度に苦労の多い補助委員の役目を献身的にやってくれ，円滑なレース運営に大きな力となった。

残念なことは，毎回レースに活躍した木更津コリンシャン・ヨット・クラブの４艇がハワイに引揚げ，また愉快な連中だったフォスター氏をはじめとするメンバーもみな６月一杯で国へ帰るようになったことである。

一方，艇もメンバーも一年毎に着実に増えて行き，100から始まったセイルナンバーも４年で155までになった。５月には四国，大阪，神戸，和歌山，三原，広島方面のクルーザーを中心としてＮＯＲＣ瀬戸内海支部が発足した。関東支部とはまた別の，内海の特色を生かし，クルージングとレースを基にした活躍が期待されている。

発足以来の４年半を顧みる時，次の事柄が特に強く思いおこされる。

(1) 横山氏が本誌先月号で述べられているように，ＣＣＪという立派な基礎があったからこそＮＯＲＣがそれを引きつぎ，今日の盛大な外洋レースが行えるようになった。

(2) 創立以来絶えず，マッケンジー氏から適切な助言を得られたこと，ファストネットレースやその他ＲＯＲＣレースに参加した深い経験のある氏は，実際的な潮気のある教えを，我々日本人仲間に示してくれた。

(3) レースが始まってから健全なオーシャン・レーサーが次々と増えていった。これはＲＯＲＣルールを採用したおかげである。一方在来からの旧い艇も，オーナー達が性能改善に努力を払い，一般にクルーザーの安全性が増した。

二代目“ふるたか”（渡辺21）の強風のセーリング

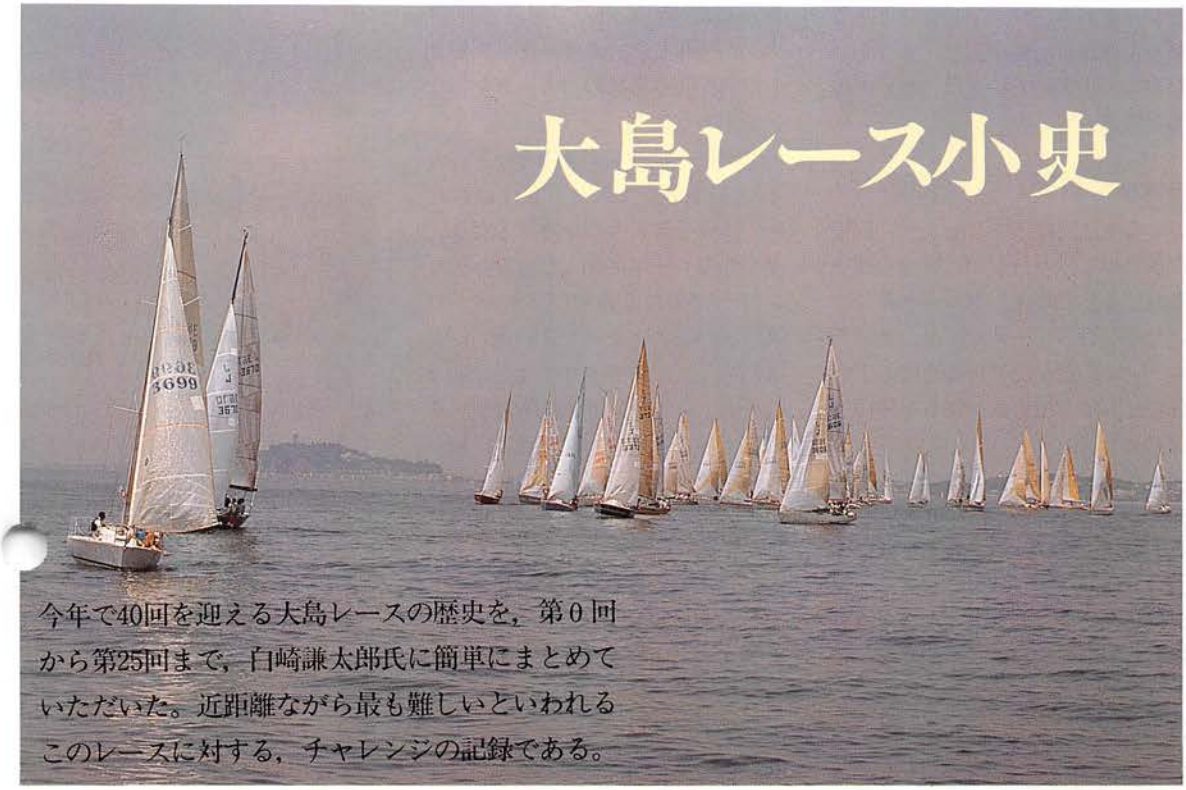
(4) 多くの若いヨット・マン達が，外洋レースの経験を持ち，各艇の航海術，運用術の技倆が格段の進歩を見せた。また外人の艇と共に走り，外人の艇のクルーとなり，ささやかながらも，国際親善の役に立っている。

(5) “まや”“フルール・ブルー”や“ベイ・レディー”等の輸出に見られるように，設計も造艇技術も急速に進歩をとげたこと。

諸外国の外洋レースにくらべると，当時の大島レース，神子元レースなどだけではまだまだスケールが小さかったのは当然である。しかし，事，海の上に関することは，実力不相応な，名前だけの派手な行為は禁物であると我々は考えていた。一歩一歩土台を積みあげ，僅かながらでも，経験を重ね，何年か，何十年か後には，フアストネット・レースやバーミューダ・レースに匹敵するような外洋レースを持ちたいと念願していたのである。

（本稿は舵誌1958年３号より一部編集の上転載したものです。）

当時の小網代湾に浮かぶ“ふるたか”。戦後，ＮＯＲＣは軍艦旗をエンサインとしてロイドに正式に登録していた。



大島レース小史

今年で40回を迎える大島レースの歴史を，第０回から第25回まで，白崎謙太郎氏に簡単にまとめていただいた。近距離ながら最も難しいといわれるこのレースに対する，チャレンジの記録である。

昨年の大島レースのスタート・シーン

第０回（1950年　昭和25年）

第一回の大島レースは昭和26年のことだったが，相模湾を舞台にした外洋レースは戦前にも行われていた。戦後になって初の外洋レースは，その前年昭和25年であった。横浜―大島・岡田間の片道レースであった。日米親善という形で行われたこのレースは，日本側から慶応大学の“アーゴノート”（28ft，戦前の若草）および米国側から２隻が出艇したが，強風下のレースとなり“アーゴノート”だけが唯一完走した。このレースのいきさつは本誌先月号横山晃氏の手記に詳しい。増田一義艇長ら６名のクルーは整備にも万全を期し，この大島レース前史というべきレースを手中にした。

第１回（1951年　昭和26年）

第一回大島レース（翌年シルバーカップと称した）は昭和26年に17隻のエントリーのもとに行われた。ＤＮＳは２隻あったが，他は元気にスタートしていった。うち日本艇は３隻のみ（“さくら”“アーゴノート”“潮風”）であったが外国人の艇にも７～８名の日本人クルーが乗艇している。ＲＯＲＣのハンディキャップルールが用いられ，各艇時間差のスタートとしたが，合図とともにアンカーをあげ，セールをあげて出て行くというのどかな風景であった。一位は日本大学の“さくら”（25ft，横山晃艇長）が勝ちとった。この艇は当時制定されたばかりの５Ｃクラス（一定の大きさの範囲内で設計は自由になされていた。物品税の面で特典があった）の新鋭艇で，横山氏によればシーホースを7.5mに拡大してフィンキールを付けたようなカッター訓練的トレーニング・シップであり，レースのためにキャンバス張りの仮キャビンを急造したボートだったとのことである。次いで“アーゴノート”，“ＪＵＮＩ”が続いた。“ＪＵＮＩ”は上り性能に劣る30ftの重いケッチであったが，土井悦艇長の正確なナビゲーションと操船で好成績をおさめた。渡辺修治氏は米国の“わたりどり”（49ftケッチ）に乗りフォアデッキ

をかけまわり，マストにのぼりトラブルを修理し，獅子奮尽の働きをしながら，次回のレースは自艇での参加を決意していた。

第2回（1952年　昭和27年）

この年は14隻のエントリー，12隻の参加艇で行われたが，風から強い潮流，そして時化とクルーを充分にいためつけるレースだった。ソプラニーノの影響を受けた高性能のＪＯＧがぼちぼち現われ，強さを発揮しはじめた年だった。１位の“インディペンデンス”，２位の“アルバトロス”等である。22～23ftのこれらの艇は大時化のもとでも見事にその能力を発揮した。“インディペンデンス”には設計者の横山晃氏が艇長として乗りこみ，２年連続優勝スキッパーとなった。クルーとしては，オーナーの山口四郎氏の他，福永昭氏，加藤松夫氏，高村孝氏といった後の外洋ヨットの中心的な担い手達が参加している。渡辺修治氏は自らの20ftデイセーラーを改造してセミキール，センターボーダーとして参加したが，伊豆東岸の強風の上りでのぼり切れず，川奈に入港して棄権している。その後本格的にＪＯＧととりくみ，数々の名艇を生み出すことになる。福永氏，高村氏にとっては，自らオーナー，スキッパーとして参加したいという強い決意をもたらしたと想像される。

第3回（1953年　昭和28年）

第３回（昭和28年）は前回２位に甘んじた新（あたらし）兄弟の“アルバトロス”が優勝した。クルーとして参加した名手岡本豊氏の力も大きかったのであろう。

スタートはハンディキャップにもとづく時間差スタートで行われたが，４～５㍍のスピンランとなり，華やかなレース展開となった。スピンワークのたくみな“アルバトロス”はハンディキャップの近い“ともだち”，“クラタワ”などを次々にかわし，トップで初島を回航，その後も風力を増した北東風に，軽いＪＯＧの特長を生かして，快走を続けた。唯一の本格的な重量型外洋レーサー“ムヤ”は水温計測を続けながら，オーソドックスな航法で，徐々に順位を上げていった。夜半から北東風は増し，リタイヤ艇の多くはこの夜半の時化との戦いで力つきたのであろう。先頭の“アルバトロス”は大島を回ってから真鶴にコースをとり大きなタックで相模湾の奥深く突っ込んだ。その後真鶴沖から７時間を要して葉山にフィニッシュ。一時間おくれて“ムヤ”がフィニッシュ，伊東に停泊した“クエスト”が一昼夜おくれでフィニッシュして，完走３艇というレースであった。

第4回（1954年　昭和29年）

日本４隻，米国７隻，英国１隻の参加を得て行われ，“ムヤ”が優勝した。レース艇はスタート後10㍍の強風にスピンをあげ，一路初島に向った。トップで初島を回ったのは“風早”で３時間23分の速さであった。一分おくれて“ムヤ”，つづいて“ヒウン”“マヤ”“アルバトロス”“桜”“モカディック”と続いた。各艇スピンを下し，小型のジブに変え，アビームで大島に向った。20～21時頃各艇は波浮をかわし，長い夜の強風の上りコースへとつっこんでいった。ここで，ギリギリの上りコースに挑戦していった艇と，海流にさからわずややおとしぎみに大磯・小田原方面にコースをとった艇と，激浪にたたかれて北上出来ずリタイヤした艇とわかれた。勝利の女神は果敢に上りコースに挑んだ“ムヤ”にかがやき，23ftのＪＯＧながら，ほぼ同じコースを上り切った“マヤ”も２位に入った。“ムヤ”の所要時間19時間55分という記録はその後20年近く破られなかった。“マヤ”は関根久，福永昭両氏の共同所有艇でこのレースは関根久氏が艇長をつとめた。

第８回のレースでディスマストし，曳航される“くろしお”

第5回（1955年　昭和30年）

第５回は昭和30年５月６日の午後８時にスタートした。12隻の参加でＳＳＷ８～15㍍，晴という状況で各艇赤と緑の艇海灯を光らせながらスタートした。しかし真夜中をすぎると風はおち，NWに変わった。２時35分“マヤ”が初島を回航，４時に“どんがめ”が回航した。トップで初島に向かっていた“風早”はトラブルでリタイヤした。大島へのコースはやはり潮との戦いであった。“どんがめ”は伊豆半島東岸ぞいの南下が足りず大島に早くつっかけす

昭和30年代の葉山。大島レースは当初より葉山スタートだった。

ぎ，風早崎近くでタックをくり返すハメになり最終グループまで順位が落ちリタイヤ。波浮をまわって，大島の吹きおろしと，潮をよく読んだ“フルール・ブルー”が26時間14分30秒でファーストホームでフィニッシュした。艇長は土井悦氏，２位には豊島邦太艇長の“マヤ”，３位には岡本豊艇長の“アルバトロス”とやはりＪＯＧが上位を独占した。

第６回（1956年　昭和31年）

第６回は18隻が参加した。スタートは正午12時，おりからのぐずついた空もようも峠を越しＮＥ風力２でピンスタートとなった。しかし初島回航の手前からしだいに雨があがると同時に風がおちた。“どんがめ”他の小型艇は弱い北風と岸ベタの南下流にのって日蓮崎あたりまで南下してから大島に向った。この後はＳＥの良い風にのって“どんがめ”が快走をつづけた。なんとスタート以来風向，強弱の変化はあるものの，終始スピンをあげっぱなしのレースとなった。ファーストホームは昨年の優勝艇“フルール・ブルー”艇長は岡本豊氏。修正順位は１位“どんがめ”，２位“シャーク”（関根久氏），３位“ふるたか”（福永昭氏）と20ftＪＯＧが上位を独占した。関根氏と福永氏は“マヤ”で共同オーナーであったが，それぞれ，20ftの自艇で参加して相まみえることになった。このレースには竹下政彦氏，土井悦氏らの常連に加え小田達夫氏が“ジョビアルファイブ”で初参加している。18隻中外国人所有の艇は７艇と日本艇が多くなった。

第７回（1957年　昭和32年）

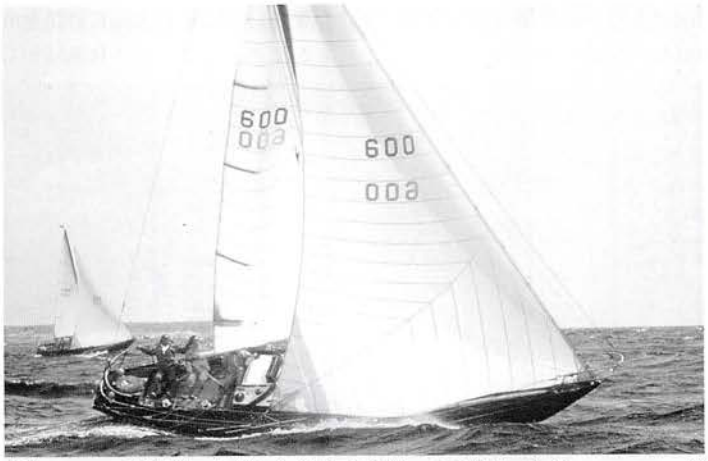
第７回は参加15隻で行われた。５月17日正午Ｓ５㍍の風の中を各艇クローズのスタートを切って初島に向った。艇団が平塚沖くらいで風力が７～８㍍に増したが初島にとりつくと西のムラッ気な微風に変わってしまった。各艇定石どおり伊豆半島東岸を岸ベタの南下流をあてにして，ベロンコで帆をだらりと下げている間に，“ふるたか”と“レッドウィッチ”は沖のわずかな南下流をさがしあて，岸ベタの各艇から見ると嘘のようなＳＷの良い風をひろって快走を続けて大島へと近づいていった。元村沖まで達すると，さすがに黒潮の北東流にはばまれたが，岸ベタでタックをくりかえしながら南下していった。“レッドウィッチ”は早朝03:30に“古鷹”は04:40に波浮をかわし葉山へのレグに入った。他は大幅におくれ，夜が明けて三番手の“マヤ”がやっと日蓮崎と千波崎の間で良い風をひろい大島に近づきつつあった。潮と風道の読みが大きく勝負を分けたレースとなった。優勝艇“古鷹”の福永艇長が，こまかく水温計測をして黒潮の流れを読んだのが勝利の一因だったようだ。

第８回（1958年　昭和33年）

第８回（昭和33年）は17隻の参加で行われた。うち３艇は新造艇である。参加艇中最大の艇は“レッドウイング”，シルバー氏の美しいヨールである。“どんがめ”は21ftの合板の新艇で参加した。５月３日正午のスタートであったが，夜になるとともに風が強まり，暴風雨となった。“くろしお”はマストを折り，前年の優勝艇“古鷹”はラダーを折損，応急舵で伊東に避難，“ミッチャン”は房総へ避難したが他は見事に時化をのりきりレースを終えた。大型艇のＡクラスはマッケンジー氏の“ムヤ”がクラス１位，総合１位となり“どんがめＶ”がＢクラス１位，総合２位となった。この頃になると戦前からの生き残り艇はしだいに現役をしりぞき，新時代のＪＯＧが全盛期を迎えていたが，新しい設計の外国人所有の大型艇もその勇姿を現すようになって来た。

第９回（1959年　昭和34年）

第９回は16隻の参加で５月３日スタートで行われた。このレースのスタート風景はいつもと雰囲気が異なった。それもそのはずで，“フライングフィニッシュIII”には映画スターで人気者の石原裕次郎がクルーとして乗りこんでいたのである。そのうえ石原慎太郎現ＮＯＲＣ会長の



外洋レースの一時代を築いた“竜王”。第19回の大島レースで優勝している

第20回にファースト・ホーム，クラスⅠ～Ⅲ　優勝の“バーゴ”

小説「ヨットと少年」の大島レースのスタート風景のロケがあり，一目見ようとギャラリーが大ぜいつめかけたのだった。常になく華やかなスタートを切った各艇はスピンをあげ初島をめざした。南下して南の吹き出しをねらう艇と，箱根の吹き下しをねらって北よりにコースをとる艇と，直線コースを行くものに分れた。ここでまず直線コース艇が脱落。そして例によって次の南下コースで大きく艇差がつく。やがて南からの強風が吹き荒れ，各艇は苦戦を強いられる。大島をまわり北上するコースでは各艇滑走しつづけ，マッケンジー氏の“ムヤ”が一着でフィニッシュ，つづいて“シャークVII”“シャークVIII”“フライングフィニッシュIII”が入った。優勝は“フライングフィニッシュIII”，2位“古鷹”，3位“ジョビアルファイブ”であった。

第10回（1960年　昭和35年）

第10回は5月27日正午スタートでAクラス9隻，Bクラス7隻の計16隻の参加で行われた。初島までは数時間で達する順調な航海であったが，この後無風と潮にはばまれながらも早朝波浮に達したが，そこで数時間も動けず，やっと吹き出したSWで各艇息を吹きかえし走り出したのである。

この時期，大島東岸にはNEに向う黒潮とSWに向う強い反流があり，それらをどう生かしどう乗り切るかのトップ争いがし烈に行われた。優勝した“月光”（21ft）でおよそ30時間を要したレースはおおむねフィニッシュは大きい順，修正順位は小さい順であった。出場艇を見ると外国人の艇は4隻と少なくなった。後に琵琶湖で軽飛行機の事故により亡くなったE．J．シルバー氏の“レッド・ウイング”，NHKの放送でおなじみのルイス・ブッシュ氏の参加が眼をひく。日本艇では新鋭の大型レーサー“さがみII”の飯島兄弟，“月光”のスキッパーとして福留清彦氏が参加した。

第11回（1961年　昭和36年）

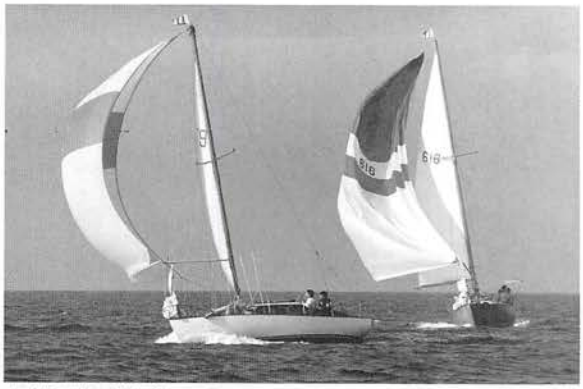
第11回は5月27日スタートで，強風下のもと24隻という多数の参加で行われた。スタート後南風が強まり“ブルーリボン”がメインマストを折る。“セプテンバー”“シャークVII”もリギントラブルでリタイヤ，“シレナ”はテイラー基部のトラブルで波浮へ入港。“タート”は油壺，その後の外洋レースで大活躍する陳秀夫氏の“マリーII”は網代へリタイヤ，オーナーが変った“さがみI”はラダートラブルで慶応の“アーゴノート”に助けられ波浮へ入港，その後レースを続行した“アーゴノート”はNORCから表彰された。優勝は“マヤII”，2位に22ftとなった“どんがめVI”，3位“潮風”の順であった。

第12回（1962年　昭和37年）

第12回は5月5日31隻の参加を得て行われた。NE 6m/s雨天のスタートであったが，6時間後トップ艇団が初島に達した。その間“ダボハゼ”（20ft）がトラブルでリタイヤ。夜半に波浮沖に達した各艇はその後Sに回った弱い風にのって北進，ここで北上するコースをどうとるかが勝負の分かれ目となった。直線コースを引いた各艇は強い潮流に乗せられ，野島崎方面にまで持っていかれてしまった。相模湾中央部に艇首を向けた“さがみII”“アーゴノート”“ブルー・リボン”“シャークVII”“バレリーナ”などにとって有利なコースとなった。“さがみII”と“ブルー・リボン”はファーストホーム争いのデッドヒートを演じ，わずか2分ちょっとの差で“さがみII”が逃げ切った。しかし修正一位は“アーゴノート”，2位は“どんがめVI”，3位“フライングフィニッシュIII”，4位“モサII”，5位“シレナ”と上位はJOGで占められた。外国人の艇は“バレリーナ”と“ホワイト・クレスト”の2隻のみであった。

第13回（1963年　昭和38年）

第13回は珍しく4月28日09:00のスタートとなった。前年11月わが国外洋レース界はじめて11名の犠牲者を出す大事故が発生し，新たな決意のもとでこの大島レースとなった。スタートは高気圧が去り低気圧が近からせまり，しかも微風といういやな気象条件だったが，やはり山場は伊豆半島のどこから大島に針路を向けるかにあったようだ。日蓮崎から



左，第14回で完全優勝，18回でも総合優勝している“シレナ”。右は第21回でクラスI～III優勝の“レッドシャーク”

手前，第22回にクラスII～V総合で優勝した“くろしおII”

大島に向った“さがみII”“シレナ”の判断がピタリと当たり，先行する“コンテッサII”“シーキング”などの大型艇に追いついた。大事をとってさらに南下した艇は遅れ，初島から直接大島に向かった“コンパスローズ”らは例によって風早崎下の潮に悩まされた。同艇は日本一周中の関西の艇でこの海域の潮には不慣れであった。24ftの“シレナ”は大型艇の“コンテッサII”“シーキング”等をおさえてファーストホームしたが修正一位は21ftの合板艇“アオレレ”，2位はわずかの差で“シレナ”，3位は“モサ”であった。

第14回（1964年　昭和39年）

第14回は5月23日，12:00スタート24隻の参加で5月らしい時化にも出会ったが全艇完走。しかも最終艇が25時間と，初期の頃の大島レースでは考えられない水準のレース展開であった。上位をしめた艇は門脇から川奈への南下流のつかみ方が巧みであった。大島東岸の夜明け時20%に達する三原山の吹下しの中“ダモイ”（高村孝）“シレナ”（大儀見薫）“ノブチャン”（安岡信一）“カマクラ”（近藤禎之）の各艇長は激しいデッドヒートを演じ，“シレナ”が巧みな岸よりコースで抜き出て，後は平均7ノットの快速で葉山に向かった。前年ファーストホームしたがおしくも修正2位の“シレナ”は今度は2位に50分近く差をつけた段ちがいの走りで快勝した。この年始めてFRP艇“カマクラ”（渡辺修治設計24ft）が登場した。

第15回（1965年　昭和40年）

第15回は参加23隻で5月29日のスタートであったが稀に見る大時化のレースとなった。スタート時こそ4%であったが，すぐにスピンをあげられる風になり，しだいに強まった。各艇ブローチングしたり，“ロータス”のようにスピンがトップからちぎれたりする艇が続出したが，トップ艇団は2時間半ほどで初島付近に達した。風力はさらに強まり潮と逆風と激浪にほんろうされ，かなりの艇がこの先の困難な状況を考えこの時点で伊東などへリタイヤ入港した。果敢に大島につっかけた艇は波浮から北に進路を向けたとたん20～30%のNEと3～4mの高波につっこんでいかなければならなかった。自艇の位置が確認出来ず新島付近まで流された艇，伊東東岸にもどりリタイヤする艇が続出した。“どんがめVII”“モサIII”などがじりじりと北上を続け夜も白みかけた頃，相模湾の中に入ると風も波もしだいに落ちつき“どんがめVII”だけが23時間をかけてフィニッシュ，他はすべてリタイヤとなった。渡辺修治氏は無二の相棒星護郎氏と新人の鈴木康之氏，白崎謙太郎をしたがえ，すべての賞をさらって，二連勝をねらっていた大儀見薫氏等をくやしがらせた。行方不明さわぎなどあったが，全ての艇がこの大時化の海で完全に艇をコントロールした。外洋ヨットが海と適合しえるような時代となったといえるであろう。

第16回（1966年　昭和41年）

第16回は5月28日12:0021隻のスタートとなった。出場艇はしだいに大型化し24～25ftが主力で，20～21ftのJOG時代は終った感があった。スタート2時間足らずで“さがみII”がマストを折ってリタイヤ，その他7隻のリタイヤ艇の大半はSWの風と大島での北東流で回航に失敗している。“アオレレII”は“シレナ”に先行して波浮を回航したが翌日の勤務を考えリタイヤ，機走でホームポートに向った。60年代当時の企業戦士たちの様子を伝えている。“ロータス”と“コンテッサII”がスタート時，ポート・スターボートのケースが生じ，“コンテッサII”に5%のペナルティが課せられたが，これはNORCレースで始めてのケースであった。ファーストホームの美酒は“コンテッサII”，優勝は26ftの合板艇“トンガ”のR.A.クーパー氏をはじめとする米国人クルーが勝ちとり，“シグナス”“ジョビアル・ファイブII”の小田達夫デザインの姉妹艇が2位，3位であった。

第17回（1967年　昭和42年）

第17回，この年は始めて小網代スタートで行われた。出場27隻。大型艇が増えNORCの外洋ヨットの充実を示している。“K7”（37ft）

第28回でファースト・ホーム，クラスI～IV優勝の“コンテッサVI”

第31回で12時間52分18秒というレコードを打ち立て，総合優勝した“ビッグアップル”。

“マイグレーター”（39ft）“ロータス”（36ft）“潮風III”（36ft）“ミス・サンバード”（43ft）“コンテッサII”（36ft）“サーモンII”（32ft）と，大型艇艦隊の勢ぞろいは見事であった。スピンスタートとなったが，初島付近で風が落ち強い潮流をどう乗り切るかが前半の山場であった。波浮からの上りは当時混存していたスループとヨールの上り較べとなったが，その結果は明らかにスループに利があり，しだいにヨールが姿を消すきっかけとなった。ファーストホームは“ミス・サンバード”，修正１位は“モサIII”，２位は“シャークX”，３位“かまくら”，４位“シレナ”であった。

第18回（1968年　昭和43年）

第18回この年も小網代スタートで行われた。艇の大型化はますます進み，30ft前後の艇と当時の標準型ともいえる24,5ft艇軍，さらに小型の“朝風”（22ft）“ナジャII”（23ft）らがどんなレースを展開するかに興味が持たれた。N３～４%の中“潮風III”“ナジャII”が良いスタートを切り19隻がスタートしていった。“天城”だけが南よりのコースを引き他は一団となって初島へ向った。初島付近で風が落ちたが，やがて夜半から早朝にかけてNEに変わった風を受けて波浮をまわった各艇は，上りのコースで勝敗を争うことになった。

最新鋭の外洋レーサー“はやまる”（33ft，武市俊設計）がファーストホーム，修正一位は“シレナ”が得た。２位は“はやまる”，３位“八丈”，４位“天城”，５位“モサIII”，６位“ナジャII”，７位“シャークX”，８位“飛車角II”…なんと出場19隻中約半数が小網代フリートであった。

第19回（1969年　昭和44年）

第19回はやはり前半に引続き小網代スタートで25隻が参加した。大型艇はますます充実し24,5ft以下は半数近くにまで少なくなった。全艇スピンで５～６ノットの艇速で初島に向った。かなり強い低気圧が接近中であり，海上保安部から中止の勧告もあったが，すでに各艇スタートした後でもありレース続行は各艇長の判断にまかされた。“サーモンII”がリタイヤ，つづいて“彩雲”“くろしお”がリタイヤした。レース続行中の艇では“メルジーネ”（合板の32ft）が快走し初島に２時間半で達した。大島までのコースもスピンを張り続けることができ，“サンバード”がその艇の長さにものを言わせてトップで竜王崎をまわった。このレグでも風が東にふれフリーで快走を続けて22時30分フィニッシュ。所要時間は13時間30分29秒。全コース大むねフリーという好運にめぐまれ“ムヤ”が19年間保持したコースレコードは大幅に破られることになった。しかしコースが違うので参考記録である。優勝は“竜王”，２位“はやまる”，３位“潮風”，以下“ミス・サンバード”“コンテッサII”と大型艇が上位を占めた。

第20回（1970年　昭和45年）

第20回は小網代スタートで29隻の参加で行われた。この時の大島レースは他レースとのシリーズレースの一つで各艇の得点争いも興味深いものがあった。ファーストホーム，クラスI～III総合は“バーゴ”，クラスIV・V総合は“ケロニアII”という結果であった。この頃からFRPの小型量産艇が現れ，めざましい活躍を始めた。“ケロニヤII”“サモアII”“そよかぜ”など武市俊設計のリンフォース工業のJOGがそれである。まだ大型艇のFRP時代にはいたらないが，これらのFRP艇が外洋ヨットの普及に果たした役割りは大きい。上記３艇はクラスVの小型艇での上位を独占している。一方“シレナ”“サガミII”などの一時代を築いた名艇が第一線から姿を消している。

第21回（1971年　昭和46年）

38艇が参加した第21回のスタート時は，極端な微風で，全艇スタートするまでに30分もかかった。やがて，風はN～NE10m／sとなり，全艇初島まで真追手で快走，14～15:00には“K－７”“メルジーネ”“アミゴ”“ミスサンバード”などのトップ集団が初島に到着した。その後大島までは無風とふれの多い風に各艇悩まされることとなる。千波沖で風待ちをしていた“レッドシャーク”が他艇に先んじて風をとらえて元町沖の無風を切りぬけ，先に風をつかみ竜王にとりついた時点で勝敗の帰趨はきまった感じであった。ファーストホームは竜王，レッド

“サンバードV”も第30回で完全優勝。

シャーク（クラスⅠ～Ⅲ），ハングオーバー（クラスⅣ・Ⅴ）が優勝に輝いた。29艇完走リタイヤ９艇。

第22回（1972年　昭和47年）

スタート時ＳＷの風８ｍ／sで，初島まではポートタックの１本コース，先行艇が初島に近づくにつれ，風は除々におち３ｍ／sとなった。

初島回航に17:35“旭Ⅱ”，つづいて“ハングオーバーⅡ”（ＳＰ24）の順，“クレージーブルー”“フジⅡ”“都鳥”“シーフェラーⅢ”が続く。

各艇Ｓ～Ｗへとシフトする１～３／sの風に悩まされる。トップ集団が初島～大島の中間にあるｐｍ９～10時にかけ完全なカームとなる。やがて風はＮに変り28日2:50に“サンバードⅡ”が竜王崎をトップで回航する。このころから，前線の影響で17ｍ／sのＮが吹きはじめた。小網代までほぼ真上りとなり，このクローズの帆走が勝負を決めた。“サンバードⅡ”が21:57:30でファーストホーム，６分遅れで“旭Ⅱ”続いて“クレージーブルー”“くろしおⅡ”とフィニッシュした。

しかし“サンバートⅡ”は失格（スタート５分前のエンジン使用のため）となり，千葉大学の“くろしおⅡ”がクラスⅡ～Ⅴで優勝，２位“クレージーブルー”，３位“旭Ⅱ”，またクラスⅥ・Ⅶでは沼津フリートの自作艇“青雲”が着順・修正とも１位を占めた。

第23回（1973年　昭和48年）

５月19日10:00（クラスⅥ・Ⅷ），12:00（クラスⅠ～Ⅴ）スタート。初島回航はクラスⅥ・Ⅶでは“トレーサー”，“ケロニアⅡ”が16:00に回り（MAG90°），16:30までにクラスⅥ，Ⅶの13艇中11艇が回航している。竜王回航は“トレーサー”が6:50，“ケロニアⅡ”7:50，“イエローバード”8:00，と“トレーサー”が先行，７艇が８時台に回る。所要時間27ｈ16ｍ32ｓでクラスⅥⅦでのトレーサーが総合優勝艇となりシルバーカップを獲得した。

クラスⅠ～Ⅴでは，初島ＭＡＧ90°のタイム16:10“わだつみ”をトップに，32艇中16艇が16時台に回航，竜王回航は，“リーディングレディ”が5:06，“旭Ⅱ”が6:30，“サンスピナー”が06:45，“フジⅡ”が06:54以下７時台に５艇，あとは８～９時という状態であった，ファーストホームは所要時間25ｈ20ｍ50ｓで“サラブレッド”，クラスⅠ～Ⅴ総合１位は“サンスピナー”，同２位は“サラブレッド”，同３位は“バーバリアンⅡ”とハーフトン勢が占めた。

第20～23回まではⅠ～ⅤとⅥⅦの２グループに分け総合表彰を行っており，総合賞の表彰方式は現在と異っていた。

第24回（1974年　昭和49年）

このレースではＩＯＲＩ～Ⅷの総合優勝艇にシルバーカップが与えられ，Ａグループ（Ⅰ～Ⅴ）の優勝艇にはどんがめ杯が，Ｂグループ（Ⅵ～Ⅷ）の優勝艇には横山杯が与えられることとなった。（表彰の方式としては，初期の形式にもどったわけである）この年は37艇の参加（Ａグループ24艇，Ｂグループ13艇）で，“天城Ⅱ”が19ｈ34ｈ07ｍでファーストフォーム。総合１位として“サンボーイ”がシルバーカップを獲得している。

ＮＯＲＣのカップ台帳によれば，19回までは総合（Ａ，Ｂクラスの）優勝艇にシルバーカップが与えられた。20回よりどんがめ杯が設けられＡグループ（クラスⅠ～Ⅳ）の優勝艇に，シルバーカップはＢグループ（クラスⅤ，Ⅵ）の優勝艇に与えられた。（注：第24回の帆走指示書には「ＩＯＲ総合優勝＝シルバーカップ；Ａグループ（Ⅰ～Ⅴ）優勝＝どんがめ杯；Ｂグループ（Ⅵ，Ⅶ）優勝＝横山杯と記されている。第24回の表彰式に横山杯は間に合わなかったのではないか，と推測される）

第32回に総合優勝の“エミリーⅢ”

第25回（1975年　昭和50年）

第25回では，コースが葉山－初島－大島－葉山（85浬）と初期と同じように決定された。これには，ＣＣＪの往時のメンバーより，伝統の大島レースの時期・コース等は第一回の規定を守ってもらいたいとの強い要望があったと聞いている。以来今回までその伝統は引き継がれている。

この第25回には，70艇もの参加艇があり，正に名実共に伝統の“花の大島”レースであった。

５月24日10:00（Ⅰ～Ⅳ），10:10（Ⅴ），10:20（Ⅵ及びＮ）のスタート。ファーストフォームは“裕明”，シルバーカップは“サンバードⅡ”が獲得した。帆走委員長は松本富士也氏（以後７回も努められた）で，以来葉山フリート担当の型が今日まで続いている。歴史というタイトルなので，25回で一応は終り，後は次の機会に譲りたいと思う。

（白崎謙太郎）

石原ＮＯＲＣ会長の“コンテッサⅧ”は第35回で完全優勝を果たす。

写真提供：伊神豊・名當英臣・中島房徳・福永昭・志賀仁郎・渡辺修治・伊橋照美・大儀見薫・岡本甫の各氏、舵社・関東広報委員会・会報小委員会
（ＮＯＲＣ保存の写真で撮影者不明のものがあります。お気付きの方は御一報下さい）

大島レース全記録②

（第11回～第39回）

回数	スタート日時 帆走委員長	参加艇数 完走数	ファーストホーム 総合成績	☆艇名；〈所要時間〉；（Ｓａｉｌ№／艇種）；オーナー名 ・①②③…順位；艇名；（Ｓａｉｌ№／艇種）；オーナー名	クラス別成績	クラス	クラス…Ａ・Ｂ；ⅠⅡⅢ… ①②③…クラス順位；艇名；（Ｓａｉｌ№／艇種）オーナー名
第11回	1961年 5月27日 12:00	24艇 (16)	ファーストホーム …… 総合成績	☆潮風〈20ｈ20ｍ30ｓ〉(141/－) 山下グループ …… ①マヤⅡ（168/横山23）市川グループ ②どんがめⅥ（165/渡辺22）渡辺修司 ③潮風	クラス別成績	A B	①潮風 ②エイティエイトⅡ（横山28）伊藤 ③さがみⅡ（164/渡辺28）飯島元次 ①マヤⅡ ②どんがめⅥ ③ネプチューンⅦ（162/渡辺21）古屋徳兵衛
第12回	1962年 5月5日 12:00	31艇 (27)	ファーストホーム …… 総合成績	☆さがみⅡ〈29ｈ32ｍ20ｓ〉(164/渡辺28ft) 飯島元次 …… ①アーゴノートⅡ（158/－）金子芳雄 ②どんがめⅥ（同11回） ③フライングフィッシュⅢ（155/渡辺21）池野成	〃	A B	①シレナ（179/横山24）大儀見薫 ②ジョビアルファイブⅡ（184/小田25）小田グループ ③べんけいⅢ（186/横山28）河内二郎 ①アーゴノートⅡ ②どんがめⅥ ③フライングフィッシュⅢ
第13回	1963年 4月28日 9：00 横山 晃	21艇 (21)	ファーストホーム …… 総合成績	☆シレナ〈26ｈ45ｍ37ｓ〉(179/横山24ft) 大儀見薫 …… ①アオレレ（307/Y21） 住友Ｓ．Ｃ． ②シレナ ③モサⅡ（198/渡辺21）モサグループ	〃	A B	①シレナ ②はやとり（312/横山24）はやとりＳ．Ｃ． ③アルマダ（301/小田25）松田卓次 ①アオレレ ②モサⅡ ③バレリーナ（169/渡辺22）Ｃ．クリスチャンセン ④ＭＡＹＡⅡ（同11回）
第14回	1964年 5月23日 12:00 横山 晃	24艇 (24)	ファーストホーム …… 総合成績	☆シレナ〈21ｈ26ｍ11ｓ〉(同13回) …… ①シレナ ②フライングフィッシュⅢ（同13回） ③マスティーナ（165/渡辺22）吉野正	〃	A B	①シレナ ②ノブチャン（302/横山26）安岡信一 ③ミューズ（332/ 7.5m）金原良一 ④アルマダ（同13回） ⑤はやとり（同13回） ⑥シグナス（183/小田25）日本郵船 ①フライングフィッシュⅢ ②マスティーナ ③どんがめⅦ（315/渡辺24.5）渡辺修治

第15回	1965年 5月29日 12:00	23艇 (1)	ファースト ホーム 総合成績	☆どんがめⅦ〈23h00m22s〉(315/渡辺24.5) 渡辺修治 ①どんがめⅦ (竜王崎沖の波高3～4m・NEの風，風速20～30m/S の海域を突破一艇のみ完走)		リタイヤ	〈渡浮〉黒潮，ノブチャン，竜王丸，ケイセブン，潮風Ⅲ 〈稲取〉さがみⅡ，バレリーナ，シレナ，アオレレⅡ，チルデ 〈伊東〉ジョビアルファイブⅡ，コンテッサⅡ，サルモンⅡ，アルマダ，ジューンブライド，飛車角，ロータス 〈下田〉月光Ⅱ，イーグル 《ホームポート》マイグレーター，シークラウン，モサⅢ
第16回	1966年 5月28日 12:00 稲富 敬	21艇 (13)	ファースト ホーム 総合成績	☆コンテッサⅡ〈20h53m57s〉(188/渡辺36) 石原慎太郎 ①トンガ (383/サンダーバード26) R. A. クーパー ②シグナス (同14回) ③ジョビアルファイブⅡ (184/小田25) 小田グループ	クラス別成績	Ⅲ Ⅳ	①コンテッサⅡ ②ロータス (355/横山36) 小林亘 ①トンガ ②シグナス ③ジョビアルファイブⅡ ④かまくら (319/渡辺24) 中戸将治 ⑤飛車角 (346/渡辺24.5) 名和幸夫 (㊟クラスⅤ3艇は全艇DNF)
第17回	1967年 5月27日 8:00 安岡信一	28艇 (27)	ファースト ホーム 総合成績	☆ミスサンバード〈21h27m25S〉(380/渡辺43) 山崎達光 ①モサⅢ (366/渡辺24.5) 守屋克己 ②シャークX (340/横山26) 森村譲二 ③かまくら (同16回) (㊟17回からコースは小網代→初島→大島→小網代となる)	〃	Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ	①潮風Ⅲ (358/戸田36) 竹下政彦 ②ミスサンバード ①さがみⅡ (同12回) ②チルデ (367/岡本30) J. Janssen ①モサⅢ ②シャークX ③かまくら ④シレナ (同13回) ①朝風 (322/渡辺22) 朝比奈新
第18回	1968年 5月28日 8:00 津野守邦	19艇 (19)	ファースト ホーム 総合成績	☆はやまる〈28h27m32s〉(614/武市33) 尾島裕太郎・立花泰雄 ①シレナ (同13回) ②はやまる ③八丈 (381/横山24.5) 近藤禎之 (㊟コースは17回に同じ)	〃	Ⅱ・Ⅲ Ⅳ・Ⅴ	①はやまる ②天城 (615/渡辺33) 渡辺修治 ③飛車角Ⅱ (610/渡辺36) 名和幸夫 ①シレナ ②八丈 ③モサⅢ (同17回)
第19回	1969年 5月24日 8:00 (NV) 9:00 (ⅡⅢ) 中戸将治	25艇 (21)	ファースト ホーム 総合成績	☆ミスサンバード〈13h30m29s〉(同16回) ①竜王 (600/S.S.ワントン) 陳秀雄 ②はやまる (同18回) ③潮風Ⅲ (同17回) (㊟コースは18回に同じ)	〃	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	①潮風Ⅲ ②ミスサンバード (同17回) ①竜王 ②はやまる ③足柄 (617/渡辺33) 福永昭 ①シレナ (同13回) ②メルジーネ (394/ペン・シーポッ26) 武部喜一 ③だぼはぜⅡ (618/渡辺24.5) 土屋徳三郎
第20回	1970年 5月23日 10:00 (NV) 10:30 (ⅡⅢ) 中戸将治	29艇 (27)	ファースト ホーム クラスⅠ～Ⅲ総合 クラスⅣ・Ⅴ総合	☆バーゴ〈14h43m55s〉(640/武市36) 武田陽信 ①バーゴ ②竜王 (同19回) ③レッドシャーク (616/渡辺31) 関根久 ①ケロニアⅡ (642/TM25) 大谷正彦 ②アオレレⅣ (677/MD30) 向井七男也 ③サモアⅡ (669/TM25) 大石巌 (注コースは19回に同じ)	〃	Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ	①バーゴ ②潮風Ⅲ (同17回) ①竜王 ②レッドシャーク ③飛車角Ⅱ (同18回) ①アオレレⅣ ②つばき (635/三木31) 釜口昌久 ①ケロニアⅡ ②サモアⅡ ③そよかぜ (644/BW21) 倉本昌治

レース回数 年度　月日 参加(完走)艇数 ｽﾀｰﾄ時・ｸﾗｽ レース委員長	☆ファーストホーム艇☆ ＜所要時間＞(ﾋﾞｯｸﾙﾊﾞｰ／艇種)オーナー名 総合順位・クラス別順位・(ﾋﾞｯｸﾙﾊﾞｰ／艇種)オーナー名 ㊟レースコースは第21回～24回までは小網代→初島→大島→小網代(82浬),第25回からは葉山→初島→大島→葉山(85浬)
第21回 1971.5.29 38(29)艇 10:00-Ⅰ～Ⅲ 10:30-Ⅳ・Ⅴ 武村洋一	☆竜王☆＜27ｈ36ｍ９ｓ＞(同19回) クラスⅠ～Ⅲ総合；①レッドシャーク(同20回)，②波勝Ⅱ(678/SK31)加藤鶴喜知，③雲仙(622/ 渡渡辺33) 反田邦治 クラスⅣⅤ総合；①ハングオーバーⅡ(1044/SP-24)植木勝水，②マレアドⅤ(1063/ﾐｯｼｪﾙ24)上原一夫，③そよかぜ(同20回)
第22回 1972.5.27 39(36)艇 (DSQ1) 10:00- (Ⅵ・Ⅶ・特別) 11:00-Ⅱ～Ⅴ 関根　久	☆旭Ⅱ☆＜22ｈ03ｍ22ｓ＞(1100/SSﾜﾝﾄﾝ)小杉行雄 (DSQのｻﾝﾊﾞｰﾄﾞⅡはE.T.21ｈ57ｍ30ｓであった) クラスⅡ～Ⅴ総合；①くろしおⅡ(613/武市32)千葉大学，②クレージイブルー(1184/BW33) 中台光雄，③旭Ⅱ(同上) クラスⅥⅦ総合；①青雲(1085/杉本24)杉本光昭，②ハングオーバーⅡ(同21回)，③昌代(1018/林25) 野沢忠義 特別クラス；①そよかぜⅡ(1212/ﾌｨﾌ26)倉本昌治
第23回 1973.5.19 45(40)艇 10:00-Ⅵ・Ⅶ 12:00-Ⅰ～Ⅴ 倉本昌治	☆サラブレッド☆＜25ｈ20ｍ50ｓ＞(1176/合気道30)伊藤正 クラスⅠ～Ⅴ総合；①サンスピナー(1075/M.H.27)森村譲二，②サラブレッド(同上)，③バーバリアン(1133/FB・Ⅲ)田中彰 クラスⅥ・Ⅶ総合；①トレーサー(1314/VENDE25)三宅智久，②青雲(同11回)，③イエローバード(1230/M.H.23) 福留清彦，
第24回 1974.4.28 37(31)艇 (DSQ1) 09:00-Ⅵ・Ⅶ 09:15-Ⅰ～Ⅴ 倉本兼治	☆天城Ⅱ☆＜19h34m7s＞(1383/渡辺33)渡辺修治 総合；①サンボーイ ②レキュメール ③せらび クラスⅠ～Ⅴ総合；①せらびⅡ(1350/SS30) 秋田直哉，②ニンバス(1400/SS30) 谷善樹，③天城Ⅱ クラスⅥ～Ⅷ総合；①サンボーイ(1505/VENDE25)山田勲②レキュメール(1337/ECM)瓜生昭一，③モジャモジャ(1267/-)村上嘉昭 Ｎクラス総合；①トレーサー(1535/OCE25)三宅智久②チタⅤ(1537/OCE22)丹羽由昌
第25回 1975.5.24. 70(69)艇 10:00-Ⅰ～Ⅳ 10:10-Ⅴ 10:20-Ⅵ・Ｎ 松本富士也	☆裕明☆＜17h27m58s＞(1616/SWN-44) 佐々木史郎 総合；①サンバードⅡ,②サンバードⅢ,③わだつみ クラスⅠ～Ⅴ総合；①サンバードⅡ(1111/SSﾜﾝﾄﾝ)山崎達光，②ＪｉｎⅥ(1624/PSRS) 上原Ｋ.③わだつみ(1270/SS38) 金子一芳 クラスⅥ～Ⅷ総合；①サンバードⅢ(1652/FAR727)武村洋一，②Ｃｈｏｕ・Ｃｈｏｕ(1659/N・260)吉川Ｓ③パサト(1554/BW25) 鳥山睦郎 Ｎクラス総合；①クロウ(1447/TAKA23) 高井理，②ミスニッポンⅥ(1108/YAM36)山口彰夫
第26回 1976.5.22. 52(0)艇 松本富士也	全艇タイムリミット；ノーレース スタート11:00-クラスⅠ～Ⅴ；11:15-クラスⅥ ㊟竜馬(1788/DUO26)真道恒平ー　タイムリミット超過10ｍ16ｓ．
第27回 1977.5.21. 46(46)艇 12:00-Ⅰ～Ⅳ 12:15-Ⅴ・Ⅵ 松本富士也	☆コンテッサⅥ☆＜15ｈ15ｍ22ｓ＞(1477/ERC46)石原慎太郎 総合；①波勝，②ダズンＡ，③アイア クラスⅠ～Ⅳ総合；①波勝(1985/渡辺32) 加藤鶴喜知，②ダズンＡ(1987/DOU33)小西文雄，③マウピティ(1465/N320) 岩田禎夫， クラスⅤ・Ⅵ総合；①アイア(1974/N24B) 福田英秋②フォーセイル(2114/N24B) 近藤弘毅，③パサト(1855/F727) 鳥山睦郎
第28回 1978.5.20. 34(29)艇 12:00- Ⅴ・Ⅵ・Ｎ 12:15-Ⅰ～Ⅳ 松本富士也	☆コンテッサⅥ☆＜13ｈ59ｍ54ｓ＞(同27回) 総合；①コンテッサⅥ，②フジⅢ，③ノースウインド クラスⅠ～Ⅳ総合；①コンテッサⅥ，②フジⅢ(2112/F46)藤本達雄，③波勝(同27回) クラスⅤ・Ⅵ総合；①ノースウインド(2178/U25)並木茂士，②マジシャンⅥ(2123/YAM25)小池久雄③ニンバス-2(2004/DOU30)谷善樹
第29回 1979.5.26. 40(38)艇 12:00-Ⅴ・Ⅵ 12:15-Ⅰ～Ⅳ 松本富士也	☆月光Ⅴ☆＜15ｈ０ｍ35ｓ＞(2000/F41)並木茂士 総合；①ビッグアップル,②月光Ⅴ,③エールゲイツ クラスⅠ～Ⅳ総合；①ビッグアップル(2299/Ho144)松田栄夫，②月光Ⅴ，③エールゲイツ(1995/DOU37)今井寛途 クラスⅤ・Ⅵ総合；①ＵＦＯ(1733/NOL30)川島正道②陽焔Ⅱ(1814/GS30) 川久保史郎，③桃季Ⅱ(2234/DOU30)三林耕二
第30回 1980.5.24. 43(41)艇 11:00-Ⅴ・Ⅵ 11:15-Ⅰ～Ⅳ 松本富士也	☆サンバードⅤ☆＜14ｈ29ｍ53ｓ＞(1710/SS54) 山崎達光 総合：①サンバートⅤ，②月光Ⅵ，③ロシナンテ クラスⅠ～Ⅳ総合；①サンバードⅤ，②月光Ⅵ(240/木原39) 並木茂士，③ロシナンテ(2306/DOU42)大口真司 クラスⅤ・Ⅵ総合；①ＧＯ20(2597/NIS.30) 大谷達雄，②ニンバス-2(同29回)，③カラス(2600/TAK30)斜森保雄
第31回 1981.5.30. 40(40)艇 12:00-Ⅴ・Ⅵ 12:15-Ⅰ～Ⅳ 長東盛隆	☆ビッグアップル☆＜12ｈ37ｍ18ｓ＞(同29回) 総合；①ビッグアップル，②光，③カラス クラスⅠ～Ⅵ総合；①ビッグアップル，②光(2777/TAK40)砂田信一，③月光Ⅵ(同上) クラスⅤ・Ⅵ総合；①カラス(同上)，②ドリイ-1(1992/ELV32)今渕和夫，③スピットファイア(2510/NAK295) 岩崎正幸，
第32回 1982.5.29. 31(28)艇 12:00-Ⅴ・Ⅵ 12:15-Ⅰ～Ⅳ 山口彰夫	☆摩利支天☆＜17h9m38s＞(2872/TAK44)武田勝彦 総合；①エミリイⅢ，②摩利支天，③ペガサス クラスⅠ～Ⅳ総合；①摩利支天，②龍飛(1900/DOU33)岩瀬弘一，③白鯨(2857/IKE34)池正道 クラスⅤ・Ⅵ総合；①エミリイⅢ(3001/YOK31)田沼英明，②ペガサスⅤ(2219/TAK25)北村勝彦，③シルフィードⅢ(3002/NAK31)蒲谷和行
第33回 1983.5.28. 38(36)艇 12:00-Ⅴ・Ⅵ 12:15-Ⅰ～Ⅳ 松本富士也	☆カザ-7☆＜13h46m7s＞(1777/TAK41)深見裕二 総合；①しんきろう，②カザ-7，③ﾎﾞｰﾝﾌﾘｰⅢ クラスⅠ～Ⅳ総合；①しんきろう(2220/CAS37)蝶野春太郎，②カザ-7，③ボーンフリーⅢ(3006/NK34)佐藤泰一郎， クラスⅤ・Ⅵ総合；①ガメラ(2011/TAK31)朝河清，②シルフィードⅢ(同上)，③エミリーⅢ(3001/YOK31)田沼英明
第34回 1984.5.26 39(0)艇 長東盛隆	全艇タイムリミット；ノーレース スタート　12:00-クラスⅤ・Ⅵ 12:15-クラスⅠ～Ⅳ
第35回 1985.6.1. 34(23)艇 10:00-Ⅰ～Ⅵ 長東盛隆	☆コンテッサⅧ☆＜22ｈ45ｍ37ｓ＞(188/DOU42)石原慎太郎 総合；①コンテッサⅧ，②シークラウンⅢ，③フォーティ， クラスⅠ～Ⅳ順位；①コンテッサⅧ，②シークラウンⅢ(2979/TAK32)中立亮③フォーティ(3093/YAM34)星沢寛 クラスⅤ・Ⅵ順位；①リップルⅡ(3306/YOK31)酩俊弘，②タバサ(3333/YOK31)久保田茂，③ベーシック(3387/YOK28)小板橋博行

第36回 1986.5.31. 41(40)艇 11:00- Ⅰ～Ⅵ・CR 萩原　毅	☆摩利支天☆＜15ｈ39ｍ32ｓ＞(3420/NEL56)武田勝彦(CR　1位) 総合；①サマーノーズ，②カラス，③コンテッサⅧ クラスⅠ～Ⅳ順位；①サマーノーズ(3530/TAK34)高村宏，②カラス(3220/TAK40)斜森保雄，③コンテッサⅧ(同35回) クラスⅤ・Ⅵ順位；①バーミリオン(3447/HT31) 山本高司，②アフロデイテ(2273/YOK28)菅野道，③ペガサス(2219/TAK25)北村勝彦
第37回 1987.5.30 47(19)艇 11:30- Ⅰ～Ⅵ・CR 小田切満寿雄	☆スリーパー☆＜25ｈ11ｍ22ｓ＞(355/NM42)武部喜一 総合；①ウイル，②マテンロウ，③ハーフタイム クラスⅠ～Ⅳ順位；①ウイル(3537/YR40) 小田良二，②マテンロウ(3705/YOK40)杉山直行，③ハーフタイム(3001/YOK35)田沼英明 クラスⅤ・Ⅵ順位；①ＮＯＶＡ40(3699/HAY30)植原俊雄，(他のクラスⅤ・ⅥとCRはすべてDNF・RET)

第38回 1988.5.28. 49(40)艇 11:00- Ⅰ～Ⅵ・CR 小田切満寿雄	☆スリーパー☆＜20ｈ20ｍ40ｓ＞(同上) 総合；①スリーパー，②サニラ，③ウイル， クラスⅠ～Ⅳ順位：①スリーパー，②サニラ(3561/X3/4) 沼田尚文，③ウイル(同上)， クラスⅤ・Ⅵ順位；①再見(3670/K30R) 高橋伸博②一乗Ⅲ(1155/Y31N) 青山恒昌③ペガサス(2219/TAK25)北村勝彦 ＣＲクラス；①しょうがく坊(1579/YOK32)神保和也
第39回 1989.5.27. 43(43)艇 11:00- Ⅳ～Ⅵ・CR 11:10-Ⅰ～Ⅲ 小田切満寿雄	☆海太朗☆＜15ｈ22ｍ4ｓ＞(3290/FAR40)千葉育男 総合；①海太朗，②ブルーノート，③カラス 総合；Ⅰ～Ⅲ順位；①海太朗，②ブルーノート(3544/1T041)五十井進，③カラス(3800/TAK40)斜森保雄 クラスⅣ～Ⅵ順位；①リップルⅢ(3306/YOK30R)硲俊弘，②アフロディテ(3373/FAR33)菅野道，③写楽(3809/YR34Ⅱ) 熱田二士行 ＣＲクラス；①スプリング(3901/J33)鈴木重和，②バンブーⅡ(3568/YAM30-C)宮崎久彦，

「ニッポンチャレンジ」のオリジナルTシャツを販売します

次回アメリカス・カップに挑戦するニッポンチャレンジアメリカ杯1991委員会の公式マークを使用したオフシャルグッズを，NORCで取扱います。

このグッズは同委員会のオリジナル商品で，今回販売するものは，そのなかで最も人気のあるＴシャツ(写真)。サイズはＬ，Ｍの２種類で，価格は2200円(消費税含)。

なお、申し込みはNORC本部事務局まで現金現留でお送り下さい（送料は着払い)。

海難防止強調運動用ポスターおよび標語の募集のお知らせ

（主催）　社団法人　日本海難防止協会
財団法人　海上保安協会
（後援）　海　上　保　安　庁

社団法人日本海難防止協会と財団法人海上保安協会は，海上保安庁の後援により，平成２年度実施予定（９月16日～９月30日）の全国海難防止強調運動用のポスター及び標語を次の要領により募集いたします。

入選作品は，全国海難防止強調運動において，運動用のポスターをはじめ海難防止思想の普及・高揚活動の各資料等に使用させて頂きます。

痛ましい海難を防止し，海上における貴重な人命・財産を守るための作品を奮って応募下さるようお願いします。

募集要領

1.テーマ

海難防止思想の普及及び高揚に資するもの。

今年度においては，「仕事も遊びも安全が基本」をテーマとして，海難を防止することを訴えるものであることとします。

2.募集作品

募集作品は，ポスター及び標語とし，本人の作品で未発表のものに限ります。（それぞれ別個に応募願います。）

3.応募要領

(1)ポスター

ポスターは，Ｂ４サイズ（縦　364㎜，横　257㎜）とし，裏面に住所・氏名・職業・年齢・電話番号を明記して下さい。

(2)標語

標語は，官製はがきに１枚につき二作品以内を記入し，住所・氏名・職業・年齢・電話番号を明記して下さい。

(3)応募先

イ．最寄りの海上保安本部及び各海上保安(監)部署に郵送または直接窓口に提出して下さい。

ロ．㈳日本海難防止協会 企画部 Tel 03(502)2233
東京都港区虎ノ門１－１４－１
郵政互助会琴平ビル

4.募集期間

平成２年４月２日～同年５月７日（当日消印有効）

5.応募対象者

年齢・職業等何らの制限もありません。誰でも自由に応募できます。ポスターは小中学生の部を設けます。

6.選考方法

有識者・主催者・後援者等により，全国11ブロックで第一次選考を行い，第一次選考で選ばれた作品について，中央で第二次選考を行います。

第二次選考による最優秀作品を採用します。ただし，過去に採用された作品と同一または類似したものは選考対象から除外します。

なお，第二次選考において，入選作品（標語）に複数の応募があった場合は，主催者が抽選によって一人に決定します。

7.表彰及び賞

イ．ポスター

海上保安庁長官賞

一般の部一席（１点）	賞状と楯及び10万円
一般の部二席（１点）	賞状と楯及び５万円
小中学生の部（１点）	賞状と楯及び記念品

特別賞

一般の部（１点）	賞状と楯及び５万円
小中学生の部（１点）	賞状と楯及び記念品

管区本部長賞

一般の部(11点)	賞状と楯
小中学生の部(11点)	賞状と楯

ロ．標　語

海上保安庁長官賞

一席（１点）	賞状と楯及び10万円
二席（１点）	賞状と楯及び５万円
管区本部長賞(11点)	賞状と楯

なお，管区本部長賞以外は，旅費（小中学生は含同伴者）を当協会負担のうえ東京において表彰式を行います。

8.発表

７月上旬，海事刊行物，海上保安（監）部署の窓口で行うとともに，入選者には，直接連絡します。また，抽選によって落選した方には連絡しますが，同一作品であっても，地方における一次予選を通過しない場合は連絡いたしませんのでご了承下さい。

9.その他

・入選作品の著作権は主催者に帰属し，作品はお返ししません。

・ポスターについては，

最優秀作品‥‥Ｂ２の大きさに拡大して使用し，その際，標語，運動名等を記載します。なお，作品の一部修正，トリミング等を行うことがあります。

その他の入選作品‥‥日本海難防止協会の広報誌「海と安全」の表紙として使用することがあります。

1990年度第1回関東支部代議員会議事録

社団法人日本外洋帆走協会　関東支部

1.日　時

1990年2月17日（土）1300～1430

2.場　所

東京都港区虎ノ門1－15－16

船舶振興ビル　10F会議室

3.出席者

代議員　45名

（出席者　18名）

橋本　博，安岡信一，市村俊明，尾島祐太朗，加藤正敏
高村　宏，初鹿野幸生，平田克己，古川保夫，別部尚司
大儀見薫，菅野　道，北村勝彦，中馬　勇，横沢真則
矢吹秀邦，三宅直晴，野口隆司

（委任状　27名）

小黒公一，倉持和夫，前田泰明，三宅智久，井上　武
加藤忠男，高田尚之，中谷林平，斜森保雄，藤田弘治
桝田政治，岩瀬慶一，多門　信，田中　淳，戸田　宏
平野喜美夫，池田武邦，鈴木駿一郎，富田剛旦，田中一美
鳥本洋一，長束盛隆，松崎義邦，安原達朗，伊藤秀利
永野隆雄，吉田明俊

代議員以外の出席者

並木茂士（関東支部長・議長）

中上川貞次郎（財務担当総務委員）ほか

4.議　題

（1）1989年度事業報告及び収支決算報告
（2）1990年度事業計画及び収支予算案
（3）1989年度関東支部基金決算報告
（4）関東支部推薦NORC理事監事候補者の選出
（5）関東支部常任委員及び監事の選出
（6）総会への付議事項
（7）その他

5.議　事

1300，安岡副支部長の司会により開会，出席代議員は45名で代議員58名の過半数で定足数を充足していることを確認，並木支部長が議長となり，議事録署名人に古川，初鹿野両代議員を指名，議事に入った。

議題（1）1989年度事業報告及び収支決算報告について

中上川財務担当総務委員から，資料に基づき1989年度事業の内容について報告があり，さらに，1989年度収支決算について大要次の報告があった。

1989年度の特別要素としては，当年度から支部扱いとなった相模湾新春親善レース及び関東選手権（フリート対抗）にスポンサーの協賛がつき，大幅収入増（5,769千円）となったが，それに関連した支出も増加，単年度収支としては，750千円の赤字決算となった。しかし本年度予算については，昨年度代議員会で承認された予算案に基づき積極的な支出計画を計上していたので，絶対収支としては，対予算差額1,720千円の増収となった形で決算できた。

収入の部では，会費は対予算672千円の増，舟艇登録は，CRの活性化による会友艇の増加で対予算686千円の増となった。しかし，事業収入関係では，スポンサー協賛金を除いた場合，1,589千円の減収となった。その主な原因は，レース参加料の大幅減収が挙げられる。これは最近特に，伝統ある島回りレースに対して，参加者が減少していることが原因と思われる。スポンサー協賛金については，対予算6,000千円の増となった。これは当初予算組みされた裕次郎メモリアルレースの他，上記2レースが行われた事によるものである。

支出の部では，管理費関係で△286千円の対予算減，事業費関係では，帆走委員会の5,403千円の支出増がある。これは収入の項でもふれたとおり，新春レース約2,400千円，フリート対抗約3,000千円の支出が含まれている。ただし，島回りレースについては，参加者の減少に関わらず固定的な支出が多いためほぼ予算同額の支出となった。その他の事業費については，少額の支出減となっているが，その中のその他事業費の内容は，一昨年度から導入した会員管理システムの維持管理費である。

なお，この決算関係書類については，2月9日，飯島，横山両監事の会計監査を受け適正・正確との監査報告をいただいている。

レース運営費の増大について，種々討議が行われ、並木議長から，スポンサーから援助を得て協賛金依存型のレース運営を行うことが常態になることは，一考を要する。常任委員会でも費用減の運営について検討中である、旨の説明があった。他に，質疑等はなく，本議案を承認した。

議題（2）　1990年度事業計画及び収支予算案について

並木支部長から，資料に基づき1990年度事業計画の説明があり，ついで，中上川財務担当総務委員から，1990年度予算案について，次年度予算については，12月初旬までに各委員会，フリートキャプテンの要求案を提出していただきそれを元に1月及び2月の常任委員会において，決算見込みを対比しながら策定した。内容的にはほぼ前年度と同様に計画されている。収入の部では，レース参加料を例年通り6,000千円と考えスポンサー協賛金については本年の新春レースが，関東支部独自で開催されたのを受け，裕次郎メモリアル，フリート対抗のみを計画した。支出の部では，管理費の若干増，事業費関係

では，来年度から裕次郎メモリアルレースを特別事業とせず，通常の帆走委員会事業とした。また，帆走委員会事業費については，見直しを行った結果来年度予算については収支同額を計画することとなった。

なお，実際の運用については，常任委員会及び財務担当で内容を充分吟味して予算執行を公正に執り行う所存である。旨の説明があった。

本議案については，特に質問等はなく承認した。

議題（3） 1989年度関東支部基金決算報告について

中上川財務担当総務委員から，資料に基づき説明があり，特に質疑等はなく承認した。

議題（4） 関東支部推薦ＮＯＲＣ理事監事候補者の選出について

並木支部長及び安岡副支部長から，本案は，常任委員会の中に設置した選考委員会，フリートキャプテン会議等の討議を経、本部大儀見副会長，清水専務理事の検討を得て決定したものである，旨の経過説明があった。各代議員から種々の質問提議があり，理事監事候補者（案）の決定は原則として選挙に移行すべきで，関東支部の意見として代議員の中から理事監事を選出する旨の定款改正を提案してもらいたい。旨の提案があり，了承した。

本議案については，上記の提案を条件として承認した。

選出した理事候補者は，

朝河　清，石井正行，石原慎太郎，今岡又彦，大儀見薫
久保和男，児玉萬平，清水栄太郎，鈴木康之，並木茂士
林賢之輔，古川保夫，宮坂敬三，安岡信一，山崎達光
の15名，

選出した監事候補者は，

横山　晃，渡辺　修治の２名である。

議題（5） 関東支部常任委員及び監事の選出について

並木支部長から，常任委員及び監事候補者名簿（案）の提出があり，異議なく承認した。（常任委員及び監事候補者名簿は，別紙として本議事録に添付することとされた。）

議題（6） 総会への付議事項

議題（7） その他

両議案については，特に発言提案はなかった。

以上をもって審議を終了し，1430，1990年度第１回関東支部代議員会を終了した。

上記議事録に誤りのないことを証明し，記名押印する。

1990年２月17日　　議　長　並木　茂士　印
署名人　古川　保夫　印
署名人　初鹿野幸生　印

関東支部常任委員候補名簿（案）：90年度

監事　大儀見　薫，清水　栄太郎

顧問　梅沢　健治（神奈川県議会議員）

	役　　職	氏　名
1	支部長・総務委員長	並木　茂士
2	副支部長・総務委員	安岡　信一
3	副支部長・総務委員	古川　保夫
4	総務委員（財務担当）	中上川貞次郎
5	フリートキャプテン横浜	橋本　博
6	〃　諸磯	川久保史朗
7	〃　油壺＊	藤田　弘治
8	〃　油壺＊	別部　尚司
9	〃　シーボニア	平野喜美夫
		(蒲谷和行※)
	泊地対策委員長	平野喜美夫
10	〃　小網代	飯島征四郎
		(鈴木道雄※)
11	〃　佐島(含芦名)	石原　拓治
12	〃　葉山	田中　一美
13	〃　逗子	沼田　尚文
14	〃　江の島	五十井　進
15	〃　下田	伊藤　秀利
16	〃　東京	内藤　恒夫
17	〃　浦賀	岩澤　文男
18	〃　柏崎	渡辺　正道
19	安全委員長	前田　泰明
20	帆走委員長	小沢　美弘
21	海事思想普及委員長	(　　)
22	クルーザーレーティング委員長	尾田　英明
23	広報委員長	浅野　英武
24	通信委員長	池内　貞二
	＊油壺フリートは２名の枠	
	※サブフリートキャプテン	

海事思想，安全，帆走，クルーザーレーティング，通信，泊地，委員は各フリートキャプテンが任命すること

第34回関東支部総会議事録

社団法人日本外洋帆走協会　関東支部

1.日　時

1990年２月17日（土）　1435－1525

2.場　所

東京都港区虎ノ門１－15－16
船舶振興ビル　10Ｆ会議室

3.出席者

614名（出席39名，委任状575名）

4.議　題

（1）　1989年度事業報告及び収支決算報告
（2）　1990年度事業計画及び収支予算案
（3）　1989年度関東支部基金決算報告
（4）　常任委員会及び代議員会報告
（5）　その他

5.議　事

並木支部長の司会により開会，出席特別会員及び正会員は614名で，特別会員及び正会員2013名の５分の１以

上で，定足数を充足していることを確認，並木支部長が議長となり議事録署名人に，内藤恒夫，初鹿野幸生両氏を指名，議事に入った。

議題（1）1989年度事業報告及び収支決算報告について

中上川財務担当総務委員から，資料に基づき1989年度事業の実施内容及び収支決算に関する説明報告があり，さらに，本件については監事から適法正確であるとの監査結果をいただいた旨の報告があった。

本議案については，特に質疑はなかった。

議題（2）1990年度事業計画及び収支予算案について

並木支部長から，資料に基づき1990年度事業計画の説明があり，中上川財務担当総務委員から，1990年度収支予算案の報告があった。

本議案については，特に質疑はなかった。

議題（3）1989年度関東支部基金決算報告について

中上川財務担当総務委員から，資料に基づき報告説明があった。

本議案については，特に質疑はなかった。

議題（4）常任委員会及び代議員会報告について

並木支部長から，支部活動の活性化に関連する代議員会の議事の経過概要，常任委員会における種々の対応策の検討審議状況等の報告説明があり，また，フリートの積極的活動の要望等について討議された。

議題（5）その他について

特に発言はなかった。

ほかに，発言提案等はなく，以上で議事を終了し，1525，第34回関東支部総会を終了した。

上記議事録に誤りのないことを証明し，記名押印する。

1990年2月17日　議　長　並木　茂士　印
署名人　内藤　恒夫　印
署名人　初鹿野幸生　印

■近北支部1990年NORC春季シリーズ　ポイントレース4回戦

DATE '90/03/11　スタート時刻 10:10　NE 2～4m/Sec　レース委員長　真田　恒男

クラス	SAIL	艇名	TYPE	T.C.F	持点	着順	所用時間	修正秒	クラス順	得点	総得点	順位
I	1195	FRONT RUNNER	X-3/4	0.7553	18.25	6	03:44:04	10,154.3	7	3.000	21.250	3
I	3792	IBIZA	JEN-36.5	0.7748	0.00	3	03:35:33	10,020.5	6	4.500	4.500	10
I	4263	MAYUMI	SWN-391	0.8123	0.00	16	03:59:52	11,690.6	8	1.500	1.500	12
II	4105	CAPATAIN SANTA	YAM-30S II	0.7237	2.00	9	03:46:40	9,842.3	5	6.000	8.000	7
II	4080	NOAH EXPRESS	YAM-R30 II	0.7427	15.00	1	03:33:57	9,534.0	1	12.375	27.375	1
II	2847	Strawberry III	YAM-R30 II	0.7427	12.25	2	03:35:05	9,584.5	2	10.500	22.750	2
II	2685	湖族の末裔	J-24	0.7193	11.00	8	03:44:35	9,692.6	3	9.000	20.000	4
II	3556	FIRE BIRD IV	YAM-26SS	0.7237	0.00	5	03:43:45	9,715.7	4	7.500	7.500	8
II	3808	NOSIDE	FARR-30	0.7280	15.25	DNC	**:**:**	*********	**	0.000	15.250	5
II	3814	ADRIAN	YAM-30S II	0.7237	3.00	DNC	**:**:**	*********	**	0.000	3.000	11
II	3918	Agenes	YAM-30S II	0.7237	7.00	DNC	**:**:**	*********	**	0.000	7.000	9
II	3825	ENTERPRISE	J-24	0.7193	9.00	DNC	**:**:**	*********	**	0.000	9.000	6
IV	3724	ESPERANZA II	YOK-22	0.6660	7.00	11	03:48:03	9,112.9	4	3.000	10.000	4
IV	3950	POISSON ROUGE	TAK-1/8	0.6674	12.00	4	03:42:16	8,900.4	1	7.875	19.875	2
IV	3752	CREEK V	TAK-1/8	0.6664	14.25	10	03:47:00	9,076.4	3	4.500	18.750	3
IV	4155	DOOBIE	TAK-1/8	0.6674	16.50	7	03:44:08	8,975.2	2	6.000	22.500	1
IV	3652	FUZZY	KAN-23	0.6660	6.00	12	03:51:55	9,267.4	5	1.500	7.500	5
[illegible]	3971	MICHIKO II	YAM-23 II	0.6662	2.00	18	04:04:04	9,755.8	5	1.500	3.500	6
[illegible]	3956	MARIE	YAM-21C	0.6606	9.00	13	03:52:39	9,221.3	1	7.875	16.875	1
V	3735	Molamola	YAM-21C	0.6606	9.25	14	03:54:42	9,302.6	2	6.000	15.250	2
V	3925	LADY CAT	YAM-21S	0.6612	0.00	15	03:58:13	9,450.5	3	4.500	4.500	5
V	529	MUAMUA	YAM-21C	0.6606	5.00	17	04:03:36	9,655.3	4	3.000	8.000	4
V		ROSCH	YAM-23	0.6662	8.25	DNC	**:**:**	*********	**	0.000	8.250	3

安い航空券とホテル
ケンウッドカップ参加艇の方へ！
ハワイ 1人 126,000 より
東京発ユナイテッド航空使用　Yクラス　他にC・Fクラスあり
但し日付により値段変更があります。詳しくはご一報下さい。
プラスワントラベルサービス㈱　☎03-227-3781
東京都新宿区西新宿7－10－17

NORC支部一覧表

支部名	所在地	振込銀行口座名
北海道	〒064 札幌市中央区北1条東1丁目 ニュー1ビル 集団製作建築事務所内	北海道拓殖銀行　本店（普）069-956 社団法人　日本外洋帆走協会　北海道支部
津軽海峡	〒042 函館市湯川町1－2－39 米山義勝方 （TEL　0138-59-1234）	北海道拓殖銀行　湯川支店（普）567-556 社団法人　日本外洋帆走協会　津軽海峡支部
関東	〒105 東京都港区虎ノ門1－15－16 船舶振興ビル（TEL 03-504-1911）	住友銀行　東京公務部（普）289150 社団法人　日本外洋帆走協会
駿河湾	〒424 清水市港町2－10－2 （TEL 0543-52-1526）	駿河銀行　清水支店（普）925003 社団法人　日本外洋帆走協会　駿河湾支部
東海	〒460 名古屋市中区丸の内3－21－21 丸の内東桜ビル902 ㈱ミヤコ内 （TEL 052-971-5835）	東海銀行　大津町支店（普）307481 社団法人　日本外洋帆走協会　東海支部
近畿北陸	〒601 京都市南区東九条南烏丸町35－6 南烏丸団地1－114 三井祥功方 （TEL 075-661-0325）	郵便振替　京都2-53850 社団法人　日本外洋帆走協会　近畿北陸支部
内海	〒653 神戸市長田区大橋町7－4－7 藤原方 （TEL 078-611-5940）	太陽神戸三井銀行　姫路駅前支店 1243644 社団法人　日本外洋帆走協会　内海支部
西内海	〒732 広島市東区牛田中2－7－26 吉村明久方 （TEL 082-227-4846）	広島銀行　大手町支店（普）827827 社団法人　日本外洋帆走協会　西内海支部
玄海	〒814 福岡市中央区笹丘3－27－40 原田芳治方 （TEL 092-714-2413）	太陽神戸三井銀行 福岡支店(普)701-5237329 社団法人　日本外洋帆走協会　玄海支部
沖縄	〒903 那覇市古島85－4 ㈲アカネ商事内 識名朝典方 （TEL 0988-62-8280）	琉球銀行　安里支店（普）299083 ㈳日本外洋帆走協会　沖縄支部 識名朝典

第10回(平成3年)日韓親善ヨットレース参加資格

来年開催される第10回日韓親善ヨットレース（通称アリランレース）の出場艇及び乗組員の資格は次の通りです。是非ご一読下さる様お願い致します。過去18年間無事故を誇っており，又10回目という節目にあたり，今まで以上に参加資格を厳しくしております。例えば，対馬を出国する前に，全艇ＯＲＣ－３，ＮＯＲＣ－Ｂ以上の安全検査に基ずく安全備品の搭載確認を致します。尚，不合格艇は対馬からお帰り戴くことになるかもしれませんので，くれぐれもご留意下さい。

第10回アリランレース参加資格

参加資格：外洋レースに豊富な経験と技量がある艇，及び乗組員

1.ＯＲＣ－３，ＮＯＲＣ－Ｂ以上の安全検査に合格している艇

2.1989年６月以降，外洋レース（夜間帆走を含む）に出場した経験のある艇及び乗組員

1）玄界灘水域（関門海峡以西，平戸島以東）の艇

＊1989／６月以降，玄海支部が主催したオーバーナイトレースに出場完走した艇

1989／10月，大原杯

1990／５月，釜山対馬グアム親善レース

1990／10月，大原杯

1990／11月，ロングオフショアレース

＊1989／６月以降，ＮＯＲＣが主催，共催するしかるべきオーバーナイトレースに出場，完走した艇

鳥羽，ジャパンカップ，ビッグボート，その他

＊ＮＯＲＣ特別会員艇については1989／６月以降のレース出場状況で考慮する場合もある

2）その他の水域の艇については，ＮＯＲＣ特別会員艇で，上記と同等のレース経験を持つもの（博多，対馬まで自力回航を要す）

3.出場資格に関する提出書類：1989年６月以降出場したレースのクルーリスト及び成績表

玄海支部　帆走委員長　冬至克也

本部事務局職員募集

◇男子　４０～５５歳　固２３万上　管理職，総務，経理経験，英文理解あれば尚可

◇女子　２５～４０歳 固１６万上 経理担当 会計，経理経験，コンピュータ会計の経験あれば尚可

☆賞与２（実績５ケ月）

☆社保，交通費全額支給，退職金制度有

☆９時３０分～５時３０分　日祝隔週土休

☆４月末日までに履歴書（写真添付）送付のこと，書類選考後面接日通知致します

☆問合せ，申込先

〒105 港区虎ノ門1-15-16

船舶振興ビル４Ｆ

社団法人　日本外洋帆走協会

（０３－５０４－１９１１）

国際ＶＨＦ無線機頒布

MR-2001
固定型　国際VHF無線機

メーカー：ゼネラル・リサーチ・オブ・エレクトロニクス
出　　力：24W／１W切り替え式
電　　源：12.5V（船内電源）
寸　　法：H7.7×W25.0×D25.4cm
重　　量：2.2kg
頒布価格：77,300円(付属品含む)

MR-1001
携帯型　国際VHF無線機

メーカー：ゼネラル・リサーチ・オブ・エレクトロニクス
出　　力：４W／１W切り替え式
電　　源：11V（ニッカド電池）
寸　　法：H19.0×W68.0×D60.5cm
重　　量：0.6kg
頒布価格：74,200円(付属品含む)

国際VHF帯用アンテナ

メーカー：サガ電子工業
寸　　法：1.02m
重　　量：180g
頒布価格：6,700円(同軸ケーブル5D-FB20m付き)

無線機は海外ではＡＰＥＬＣＯブランドで売られているもので，郵政省の型式認定に合格した機種です。ＰＬＬシンセサイザー方式を採用しているので，すべての国際ＶＨＦチャンネルに対応していますが、免許上はチャンネルを指定されます。

また、携帯型無線機のみでは免許交付されませんのでご注意下さい。

ご希望の方はＮＯＲＣ事務局へ申し込んで下さい。

第2回初島ダブルハンドレースのご案内

逗子マリーナヨットクラブ

昨年に引き続きダブルハンドによる初島廻航レースを下記の要領で開催いたします。

レースは時に過酷なものですが，ヨットの原点とも言えるダブルハンドとなればそれぞれ腕に覚えのある方々が参加されるようです。今年は「オーナーが必ず乗艇し，クルーはアマチュアでなければならない」という枠をはずしました。理由は単純に多くの方に参加して頂きたいからです。

また，こんな意見もありました。「オーナーとでは怖くてレースが出来ない」というクルーの声。またプロからは「プロをレースから締め出すのは人権侵害だ」と言うのです。いずれも真剣にそう思っているわけはなく，みんなで出場したいということらしいのです。多数のご参加をお待ちしています。

＊　＊　＊

第2回初島ダブルハンドレース実施要綱

主　催：逗子マリーナヨットクラブ　　後　援：NORC関東支部　　協力：㈱逗子マリーナ

日時：6月30日㈯ 19:00スタート

〔参加資格〕

Ⅰ．参加艇　1．IOR，JORの有効なレーティングを取得している艇。
2．NORCの有効なクルーザー・レーティングを取得している艇。
3．その他主催者が特に認める艇。

Ⅱ．乗　員　夜間の初島廻航経験が3回以上または同等の経歴がある事。

Ⅲ．安全装備　船検備品。パラシュートフレア2本。ライフラフト及びハーネス。

〔コース〕

1．逗子沖→初島（反時計廻り）→逗子沖
2．逗子沖→初島（反時計廻り）→網代崎沖浮標（反時計廻り）→逗子沖

〔表彰式およびパーティ〕

日　時：7月1日〔日〕　17：30から
場　所：逗子マリーナ・レストラン『セゾン』

参加費：¥15．000（出艇料，乗員参加費，2名のパーティ費など，すべてを含む）
賞　典：ファーストホーム賞。総合1～5位（CRレーティングによる）。IORクラス，CRクラスとも1～3位。
泊　地：事前申込みの参加艇はレース前日および当日，逗子マリーナに係留できる。
申込み：所定の参加申込書に記入し，下記あて郵送またはファックスでお申込みください。
（申込み用紙は各フリートに配布してあります。）**締　切**：6月20日
申込先：〒249 逗子市小坪5-419-2　逗子マリーナヨットクラブ　Fax 0467-22-1000
出艇申告・艇長会議および参加費の支払い　6月29日〔金〕18:30　NORC10F会議室
お問い合わせ先：Tel 03-984-3761　Fax 03-982-1976　［担当・沼田］

第4回関西ミニトン選手権大会のお知らせ

第4回関西ミニトン選手権大会が下記要領にて実施されます。会員各位には応援，観戦のほどお願いします。結果の詳報は来月号掲載の予定。

主　催　日本ミニトン協会関西支部
主　管　NORC近畿北陸支部
協　賛　ヤマハ発動機㈱，マリンオフィスフジタ，レークウエストヨットクラブ
後　援　滋賀県ヨット連盟
協　力　ビワコスモールヨットクラブ

レースの日程

4月14日㈯17：00～17：40艇長会議（L.W.Y.C.会議室）
18：00～20：00前夜祭（L.W.Y.C.クラブハウス）
4月15日㈰10：30～第1レース　オリンピックコース
13：30～第2レース　オリンピックコース
4月22日㈰09：30～第3レース　オリンピックコース
12：00～第4レース　ショートディスタンス
17：00～表彰式（L.W.Y.C.クラブハウス）

開催場所　レークウエストヨットクラブ（L.W.Y.C.）
〒520-02大津市今堅田1丁目2-20　Tel0775-72-2114　ハーバーマスター　石塚俊次
上記をホームポートとする琵琶湖

SURF'90 MIURA YACHT RACE

ゴールデンウイークを相模湾で
華やかにレースとパーティで遊びましょう。

このレースは関東ミドルボート選手権シリーズに組み込まれたオープン・レースです。参加資格は問いません，クルーザー・レーティングをお持ちの方ならどなたでも参加できます。
主催はNORC関東支部ですが，三浦市の後援を頂き，株式会社タカキューと私共ミドルボートオーナーズクラブが物心両面からお手伝い致します。
４日のアフターレースにはファッショナブルなパーティを盛大に開催したいと思います。
おレース終了後，葉山，逗子，江ノ島方面でパーティに参加される方には海上より送迎を行います。

皆様のご参加を心よりお待ちしています。

主　催	NORC関東支部
協　賛	株式会社タカキュー
後　援	SURF'90三浦市企画実行委員会
大会名誉会長	三浦市長　久野隆作
名誉副会長	三浦商工会議所会頭　佐藤克己
レース委員長	古川保夫
レース運営	関東ミドルボートオーナーズクラブ
レース海域	城ケ島から佐島沖
スタート	５月４日　11時00分
参加料	5,000円
申込先	NORC事務局
賞	三浦市長杯　三浦商工会議所会頭杯
パーティ	
主催	株式会社タカキュー
運営	関東ミドルボートオーナーズクラブ
日時	５月４日　16：00～19：00

'90 GOLDEN WEEK SERIES taka-Q Cup

第２回　関東ミドルボート選手権

先日『タカキューカップ第２回関東ミドルボート選手権』の記者発表が芝浦のナウイ，ディスコGOLDでありました。

菅野道氏がミドルボートクラブを代表して，スポンサードして頂いた株式会社タカキューに謝辞を述べると共に，今回のレースタイトルとミドルボート選手権について説明があり，NORC広報委員の藤沢武司氏がヨット界の現況について，アメリカズカップ日本艇が４月に進水，ケンウッドカップに日本艇が大挙して参加することなど報告がありました。150人もの記者の前で，アガル事もなくタンタンと話していました。ヨット関係は『ヨッティング』と『舵』の２誌で他はすべてレースカー関係の記者でした。

現在までのミドルボート選手権参加申込艇

シルフィード	蒲谷和行	ハーフタイム	朝河　清
一乗	青山恒昌	CAETLA	沼田尚文
ドンキー	内藤恒夫	INDEPENDENCE	平松栄一
再見	高橋伸博	写楽	熱田二士行
APHRODITE	菅野　道	KUVERA	藤沢武司
SAMOA	大石　巌	RIPPLE	硲　俊弘
CROWN	植木正裕	ラハイナ	佐藤文昭
SEREND	中野　昭	PHOEBE	二宮宏光
KELONIA	大谷正彦	HEART	佐藤昌弘
青波行	原　均	NERA	高尾和秀
SHADOW	梅本　寛	ジュルビアン	三宅直行
海援隊	永田敬二	ネフノレオ	馬谷原宣彦
BASIC	小板橋博行	八丈	近藤禎之
コルバッチ	浅野英武	クラフトーン	小林秀徳
アミスタッド	中野一志	CARIV	桜田　隆
ガンダリア	嘉悦康人	波勝	吉岡久光

クリス・ディクソン ニッポンチャレンジに参加！

クリス・ディクソン。1961年11月生れの28才

ニッポンチャレンジアメリカ杯1991委員会は，このほどワールドヨットマッチレースの'88，'89年度チャンピオン，ニュージーランドのクリス・ディクソンと3人のニュージーランド人クルーを次回アメリカ杯挑戦艇の乗組員として迎えアメリカ杯規則の国籍条項に適合するよう外国人登録を済ませました。クリス・ディクソンはニッポンチャレンジのチームの一員として南波誠をはじめとするクルーと16人のベストメンバー（次回アメリカ杯は16人乗り）へむけてトレーニングを開始しました。

◎クリス・ディクソンコメント

「私の参加によりニッポンチャレンジチームがとても強くなると確信します。私は，スキッパー候補の一人となり，南波さんと彼のチームとともにアフターガードという重要なポジションでがんばりたい。

日本人のクルーたちは，過去3年間にトレーニング，そして海外遠征により，すばらしい実力を身につけてきている，彼らといっしょにやれることをとても誇りに思っています。

開催地は，いまだ，オークランドかサンディエゴか決定していないが，チャレンジシリーズスタートまでの18ヶ月の中で，最も強く育った選手が最終選考に選ばれるであろう」

昨年3月の『コングレッショナルカップ』でも圧倒的な強さで優勝。チームメイト，M・スパンハーケ，E・ウィリアムス，J・カトラーもNCACチームに加わる。NCAC原，松原の姿も見える(写真

オーストラリアカップ　ニッポンチャレンジ3位に入賞

2月22日から25日まで開催された「ワールドマッチレースシリーズ第2戦オーストラリアカップ（オーストラリア・フリーマントル沖）」に参戦したニッポンチャレンジアメリカ杯1991クルーチーム（チームキャプテン・南波誠艇長）は，ラウンドロビンを6勝3敗（3位）で終了し，順位決定戦ではピーターギルモア（ラウンドロビン4位）を2勝1敗で破り，3位が決定しました。

●

<ラウンドロビン>

1位　クリス・ディクソン（NZ）
2位　ゴードン・ルーカス（豪州）
→1位2位決定戦

3位　南波　誠
4位　ピーター・ギルモア（豪州）
→3位4位決定戦

<順位決定戦>

1位　クリス・ディクソン
2位　ゴードン・ルーカス　2勝1敗

3位　南波　誠
4位　ピーター・ギルモア　2勝1敗

＊2位，3位の順位は南波がルーカスにラウンドロビンで敗れたため。

<参加選手>

バルダマ・バンドロスキー（デンマーク）
ラッセル・クーツ（ニュージーランド）
クリス・ディクソン（ニュージーランド）
ピーター・ギルモア（オーストラリア）
オレ・ヨハンセン（スウェーデン）
ゴードン・ルーカス（オーストラリア）
ロス・マクドナルド（カナダ）
バートランド・バセ（フランス）
グレッグ・タワスターニャ（カナダ）
南波　誠（日本）

写真提供／ニッポンチャレンジアメリカ杯1991委員会，撮影／添畑　薫

GOODYEAR
C
37
A
A
SEBAGO
Catalina Yachts
DICKSON
D
SEBAGO

内海支部帆走委員長谷川晴彦さんを偲ぶ

ＮＯＲＣ理事　平岡英信（サントピアマリンクラブ理事長）

昨年11月４日，谷川晴彦さんがお亡くなりになった。

昨年８月にニューヨークで行われた大阪市との親善レースで，大阪市チームの団長として渡米された。チームのメンバーによると，既にアメリカでも体調が悪く，時々眠っておられたようだ。８月末帰国されたが，成田に着くとすぐにサントピアヨットクラブの会長・宮地先生の病院に入院された。肺ガンが進行しており，既に脳の方にも転移しているという重体であった。一週間程，宮地先生の病院におられ，その後，堺の自宅近くの病院に移られた。谷川さんで思いだすのは，谷川さんの奥様がガンにかかり，もう余命いくばくもないことが分かった時，彼は私に寂しげに「妻はもう長くないのです」と告げられたことだ。いつも御夫婦でサントピアの新年会やクリスマスパーティに出席され，その仲の良さは傍目にも羨ましいものがあった。

だんだんと奥様の容体も悪くなり，もうあと一ケ月しかもたないというのに，日曜日になるとサントピアのハーバーで谷川さんが一人寂しく“寅丸”を整備されているのを見かけたものだ。私が「谷川さん，奥様の所に行かないと」と言うと，彼は「日頃しないことを私がしたら，妻はガンであることに気がつく。だからこの方がいいんです」と船を一人で整備されていた。谷川さんの心中を察するに，彼は断腸の思いで船を整備していたのであろう。

谷川さんの容体が，もう長くないと分かり，そのことを貴伝名のオッチャン（前内海支部事務局長）に伝えると，「あんまり押しかけたら，晴さん，気がつくから，行かない方がええのや」と彼は痩せ我慢していた。松木先生（内海支部事務局長）は家族と連絡をとりながら，じっと我慢の子で耐えておられた。水野さんや津田さんたちも「晴さんのやつれた顔を見るのがいやや」と言ってこれもじっと耐えておられた。いよいよ，もう危ないということが分かり，安藤さんは「葬式には金がいるやろ」と，自分の貯金から100万円を出し用意された。

話は変わるが以前，我々悪童どもが集まって，貴伝名のオッチャンと谷川さんとでレースをやれとけしかけた。“寅丸”と“ミネルバ”，どちらが勝つか，内海支部主催でやろうということになった。二人とも口では強いことを言っているのだが，なかなか実現しない。谷川さんも一時その気になって，セールの面積を大きくしたり，いろいろと整備されていたが，とうとう実現はしなかった。貴伝名のオッチャンが通夜の席で「わし，勝ったな」と言ってじっと黙っておられたが，やがて「やっぱり，晴さんの勝ちやな」と呟いておられた。遊び相手が亡くなった貴伝名のオッチャンも寂しいのだろう。

谷川さんは素晴らしい友人に囲まれて，あの世に行かれた。今頃，天の川を“寅丸”に乗って極楽浄土に向かっておられるであろう。

天国では“黒潮丸”の永田さんや，“ガラシヤ”の穎川さんたち，多くのヨットマンが“寅丸”で酒を飲みながら騒いでいるであろう。

誇り高きヨットマン，大阪湾の風物詩であった谷川晴彦さん逝く。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

内海支部事務局長　松木　哲

海の上ではまだ寒さが身に染みる３月４日，サントピアヨットハーバーで昨年11月４日に亡くなった谷川晴彦さんの追悼会が行われました。約70名が谷川さんの思い出などを語り合った後沖に出て，故人の愛艇“寅丸”を中心に各艇花を投げて谷川さんの冥福を祈りました。谷川さんと言えば，内海支部のメンバーがまず思い浮かべるのは，専用コミッティボート“寅丸”の上から「ゼネラルリコール」と怒鳴る，厳格なレース委員長としての姿，そして一杯飲んでは「この頃のヨット乗りはなっとらん」とボヤク――こちらは余り大勢の人が見てはいなかったようですが――ベテランヨットマンの姿でしょう。何しろここ20年程は，内海支部のレースの大部分が谷川さんの指揮のもとで行われてきましたし，“寅丸”はレース用の装備を完備してコミッティの専用艇となっていました。悪い人のカゲ口では，「“寅丸”のマストはフラッグ掲揚用で，セールはもう無くなってしまったんでは」と言われる位でした。谷川さんは，次のレース開催地へただ一人廻航してコミッティを勤めるだけでなく，先年奥さんに先立たれてからは，レースの合間には九州の方へクルージングに行ってみたり，半ば“寅丸”に住みついたような，自称ボートピープルの生活を送っていましたから，まさに潮気の染みついたヨットマンと

参列者の献花。左側は御遺族

サントピア沖で遺品が"寅丸"(左)から投じられるのを見守る各艇。この後，各艇より同場所に献花

いうべきでしょう。

谷川さんが"寅丸"を作ったのはたしか1970年だったと思います。御本人の話では，当時は経済成長の最盛期，谷川さんの勤務していた冷暖房工事の高砂熱学は，建築ブームのおかげで大多忙，おかげ様でずい分とフトコロが暖かかったそうですが，それにしても一サラリーマンが当時日本にはほとんど無かった，47フィートの鋼製ヨットを持つのには相当な覚悟が必要だったであろうと思います。新造当時は，谷川さんもこの内海における超大型艇でレースに勝ってやろうと考えていたようですが，風の弱い内海のレースでは，レーティングの大きな艇はよほど軽くないと勝目はなく，"寅丸"も谷川さんの期待していた程の成績ではなかったようでした。それでも1972年の『第1回沖縄レース』に参加し，本格的外洋レースに期待をかけましたが，軽量艇"チタ"のスピードには及びませんでした。この頃から谷川さんはレースでの優勝に見切りをつけたらしく，次第にレースコミッティ専門に移っていったように思います。

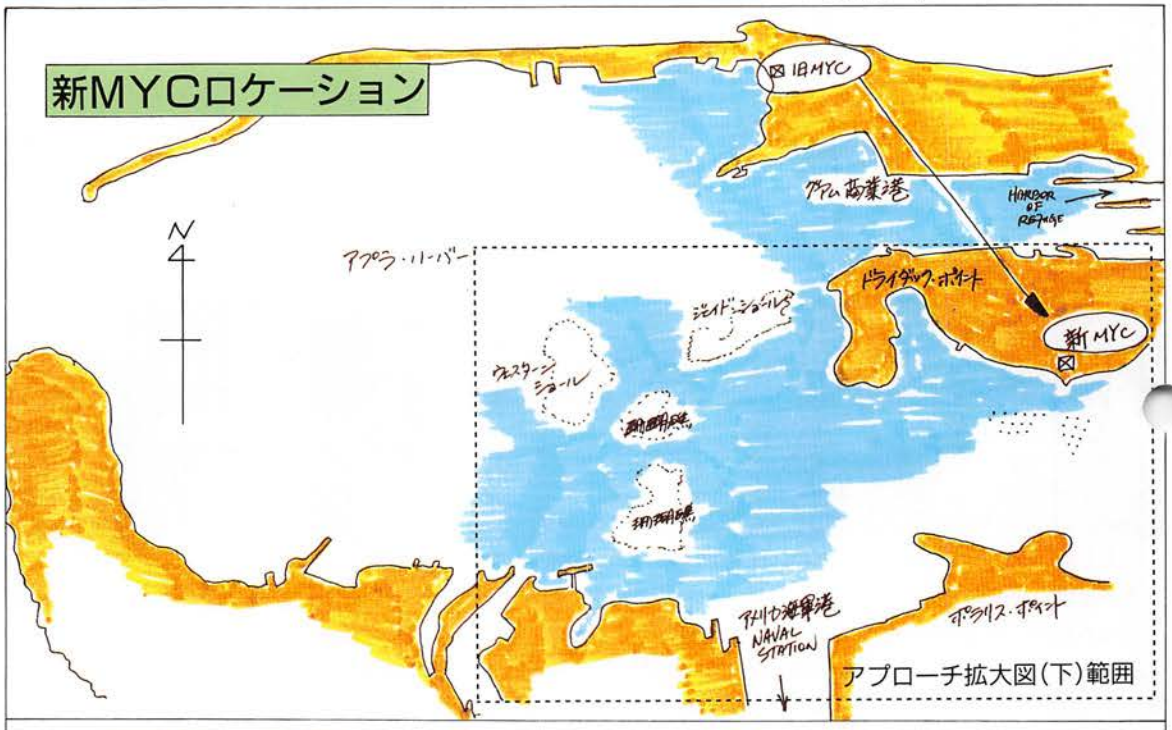
その後大分たって，谷川さんの次のレースが始まります。それは貴伝名さんの"ミネルバ"対谷川さんの"寅丸"の一騎討レースです。この2人が一杯やれば必ず，「鉄の塊りみたいなもんがまともに走るかい」「水を吸って重くなった木の艇がえらそうに言うな」と論戦が始まり，はたの悪共がけしかけて，果てはその内走り合いで役に残したるわいとなって混戦の中に眠くなっておしまいという状態がここ十年以上続いていました。我々の間ではこのマボロシの一戦を，"ミネルバ""寅丸"のジャパンカップレースと言ってましたが，ここ数年は『ジャパンカップレース』が別の所で始まってしまったためか，口先だけのマッチレースは少々影が薄くなり，一杯のあげくの論戦も回数が減り気味のようでした。十数年続きながら遂に決着の着かなかった一騎討のレースも，どうやら"ミネルバ"の不戦勝気味ですが，谷川さんはあの世で「なに，本当に走ってみれば俺の艇の方が早いに決まっとる」と息巻いているに違いありません。

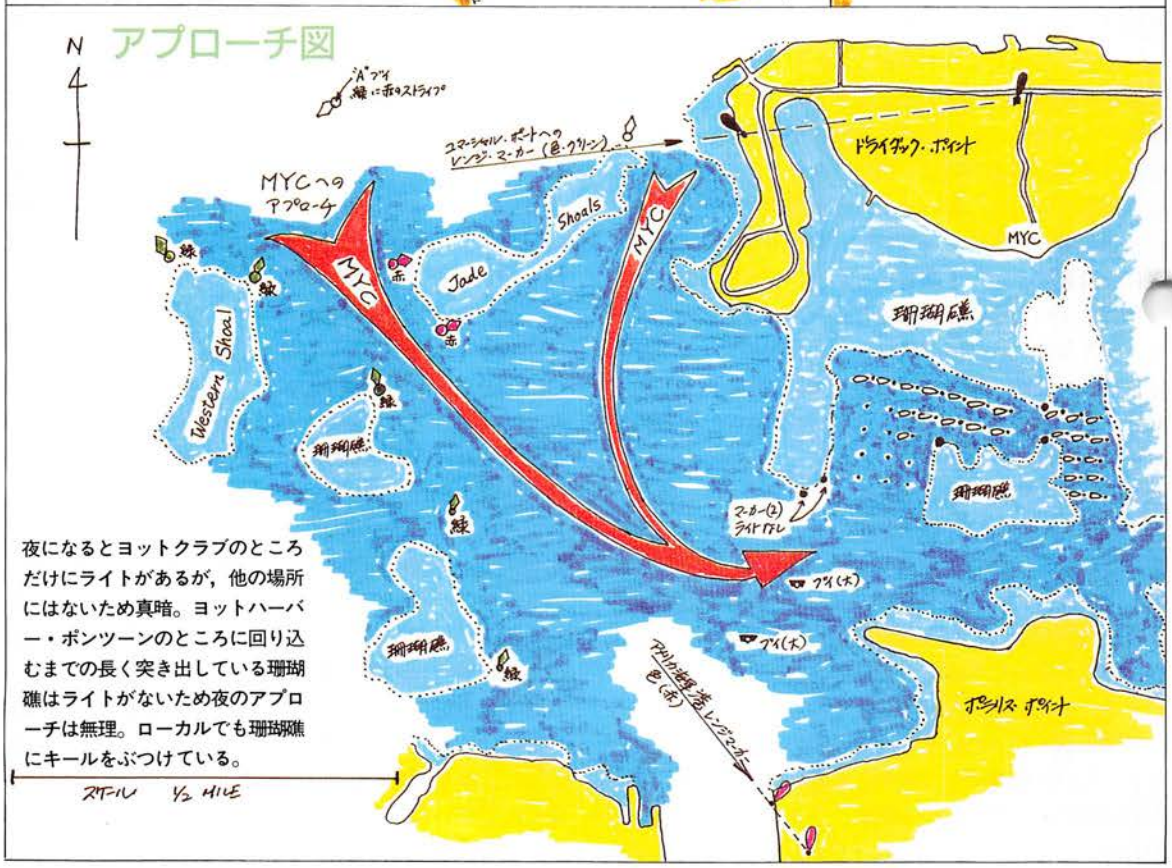
谷川さんは会社の仕事でどこかへ数日滞在しなければならない時には，ヨットに乗って行き，ヨットから出勤するような事までしていました。仕事先が瀬戸内海沿岸の行きやすい所だったためかも知れませんが，これは面白い考え方で，見習っても良いように思います。3年程前，会社を定年でやめてしばらくした頃，「この所喘息が出て来て，大阪みたいな空気の悪い所にいるとよくない。海の上へ出ると調子が良い」と言っていましたが，今から考えるとこれが肺をやられ始めた徴候だったのかも知れません。昨年9月に，大阪市から頼まれて，『インターナショナルヨットクラブチャレンジ』に参加するため，J24のチームを率いてニューヨークに出かけました。出発前少し体調が良くないと家族は止めたにも拘らず，責任感の強い谷川さんは，「万事まかされている以上やめる訳にはいかん」と出発。ニューヨーク滞在中に急速に体調が悪化し，帰国後ただちに入院。入院1ヶ月で，11月4日夕刻亡くなられました。病気は肺ガンが脳に転移して，入院した時には手の下しようがなかったとの事でした。享年62才，亡くなる前には思う存分にヨットは楽しんではいたように思いますが，今の時代では長いとは言えない一生でした。

写真提供／内海支部　浮田尚子

新MYC入港図

MYC理事G・ジョンソン氏より新MYCへの入港図をお送り頂きましたのでご紹介します（2月号P.30～31参照）。お役立て下さい。





NORC保険デスクより

海外ヨット保険をお役立てください

海外ヨット保険のお引受方法が簡素化されましたのでお知らせします。

1.お支払いする損害

「ヨットの損傷」「第3者に対する賠償責任」「救助費用」についての損害に対して保険金をお支払いします。

2.保険料の算出基準

❶航行水域別標準料率の採用

1年間の航行水域を次のA～Dでお選びいただきます。

☆A水域：日本沿海

B水域：日本沿海及びラングーン以東の，フィリピン群島などを含むアジア海域

☆C水域：スエズ以東のインド洋・アジア・オーストラリア海域および太平洋

☆D水域：世界航路

水域別料率は，スキッパー及びクルーのヨット歴をご通知いただいた上で適用いたします。

❷レース割増の採用

1年間の保険期間内に，海外レースに参加される場合には，レース割増が追加されます。

（海外レース艇料率）＝（航行水域別標準率）＋（レース割増）

❸航行水域拡張割増の採用

海外に出るのは3ヶ月間だけで，あとは国内クルージングというケースには，航行水域を日本沿海のA水域に定め，海外に出る3ヶ月間だけ該当する水域に拡張することができます。この様にしますと，最初から該当水域とするより，若干割安になります。

3.申込手順

❶アンケートの提出

所定の「保険料金算定の為のアンケート」に必要事項をご記入の上，保険デスクまでご提出下さい。

❷料率決定

アンケートを参考に御見積書を作成しご連絡致します。

❸サーベイ受検

海外ヨット保険の開始に当たり，引受保険会社の指定する機関によるボトムを含むコンディション・サーベイを受検していただきます。サーベイ費用は申込者負担となりますが，サーベイヤーは当デスクで手配できます。標準サーベイ料金は9万円前後となっています。

❹保険料振込

お申込決定を受け，請求書をお届け致しますので，所定の口座に保険料をお振込いただきます。振込日以降のご指定日から海外ヨット保険が開始されます。

4.その他

海外ヨット保険は船舶保険としての引受となっていますので，国内をカバーするNORCヨット保険とは補償する内容も異なっています。

例えば，プロペラ・シャフト等のドライブユニットについては，国内ヨット保険では免責ですが，海外ヨット保険では補償されるといった具合です。

詳細につきましては，保険デスクあてお問合せ下さい。

団体窓口　NORC保険デスク
東京都千代田区神田錦町1－9天理ビル
東南興産株式会社東京営業所内
担当：有光庄子，長尾光
TEL：0120-024410　FAX：03-291-2289

NORC認定代理店一覧　1990.2.22現在

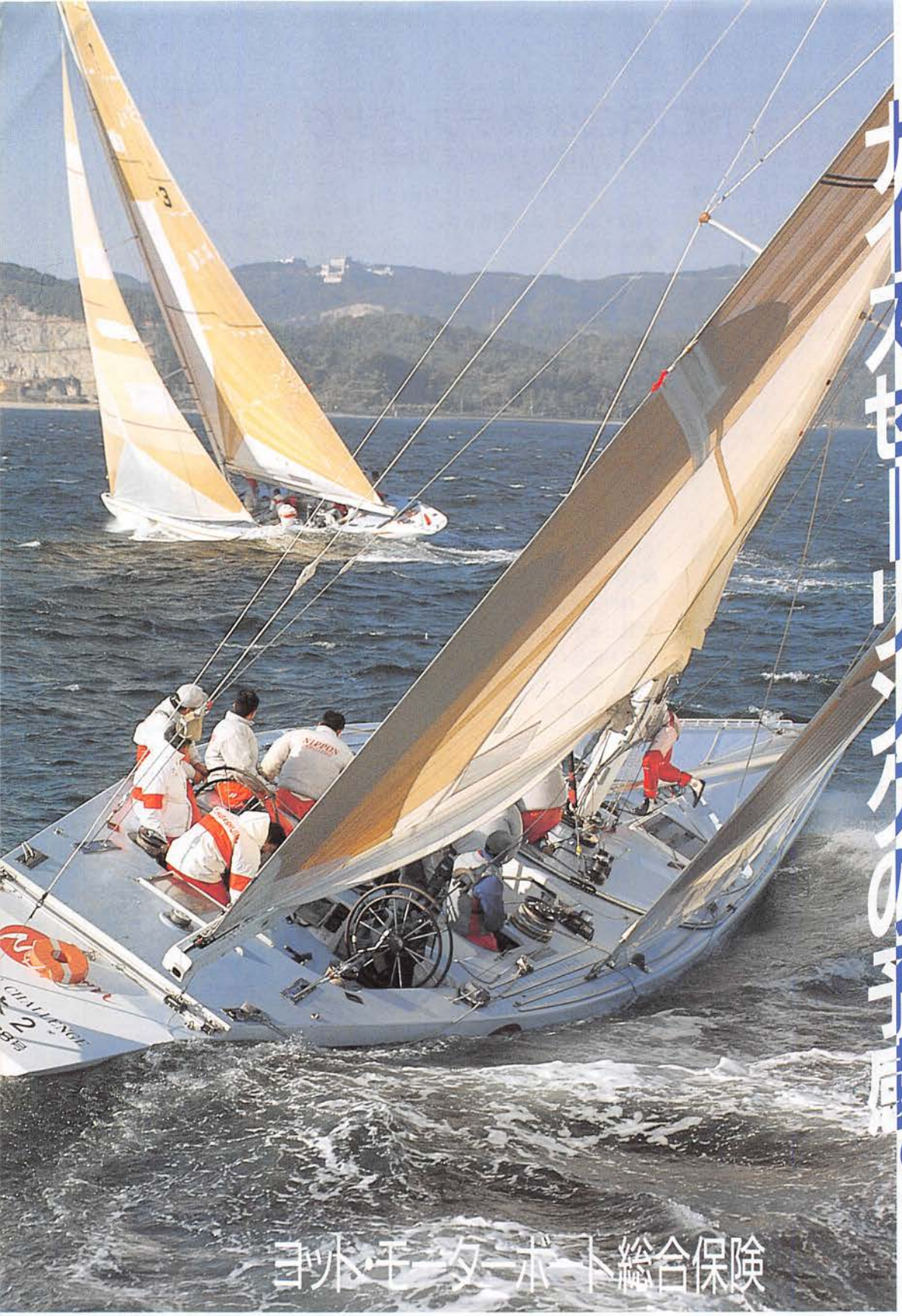
名称・会員名	〒　住所	TEL・FAX
㈱石川保険事務所 石川　昇	107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIU赤坂ビル	T:03-586-6297 F:03-584-6203
オフィス・マリン 二階堂　進	210 横浜市鶴見区市場大和町 4-1 仙台屋ビル 202	T:045-503-5377 F:045-503-1406
根岸保険事務所 根岸　径樹	198 青梅市新町 848 新町台マンション107	T:0428-31-5894
㈱ビーアイエー 秋岡　康夫	107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIU赤坂ビル	T:03-586-4411 F:03-583-2696
㈲T・A代理店 酒井　直樹	107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIU赤坂ビル	T:03-583-0783 F:03-584-6296
㈱太陽保険事務所 山口　憲二	107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIU赤坂ビル	T:03-586-3511 F:03-586-6528
㈲タケウチエージェンシー 竹内　誠	230 横浜市鶴見区下末吉1-8-14 岡安ビル 202	T:045-584-6650 F:045-584-6656
笹岡損害保険サービス 笹岡　耕平	538 大阪市鶴見区浜2-4-47	T:06-911-2017 F:06-911-1649
保険のカトー 加藤　幸雄	422 静岡市石田 3-15-5	T:0542-81-3928 F:0542-83-1316
T・I・C 田中　斉英	106 東京都港区南青山 3-8-14 パーク青山	T:03-405-8269
KATO 加藤　繁雄	475 半田市亀崎 6-80-14	T:0569-28-2340
サトーインシュアランスオフィス 佐藤　克則	733 広島市西区天満町3-19-203	T:082-293-0860 F:082-231-5231
鈴木総合保険事務所 鈴木　幹夫	475 半田市吉田町 4-108-1	T:0569-27-5051 F:0569-27-6581
㈱ファミリー旅行社 寺田　順	516-01三重県度会郡南勢町船越3113	T:05996-6-0933 F:05996-6-0341
知久保険事務所 知久　良広	730 広島市中区富士見町 2-9-103	T:082-244-5380 F:082-244-5381

今月の表紙：第39回(1989年)大島レースのスタート。優勝は葉山の雄"海太朗"であった。今年はどんなドラマが綴られるのか…。(撮影：関東支部広報委員会)

OFFSHORE　第180号　平成2年4月15日発行
毎月1回15日発行
昭和52年7月21日　第三種郵便物認可
1部定価300円（郵送料46円）

発行　社団法人　日本外洋帆走協会
東京都港区虎ノ門1-15-16(船舶振興ビル4階)
電話・東京03(504)1911～3　〒105
郵便振替番号2-21787
印刷　明宏印刷株式会社

OFFSHORE 平成2年4月15日発行（毎月1回15日発行）昭和52年7月21日第三種郵便物認可



東京海上火災保険株式会社
住友海上火災保険株式会社

お問合せ先：会員代理店またはNORC保険デスク（フリーダイヤル0120-024-410）